

武蔵国造争乱

——研究の現状と課題——

城倉 正 祥

はじめに

『日本書紀』安閑紀は、安閑元年（五三四年）の出来事として武蔵における反乱伝承を記す。

武蔵國造笠原直使主與同族小杵、相争國造、使主・小杵皆名也。経年難決也。小杵性阻有逆。心高無順。密就求援於上毛野君小熊。而謀殺使主。使主覺之走出。詣京言状。朝廷臨断、以使主為國造。而誅小杵。國造使主、悚憲交懷、不能默己。謹為國家、奉置横渟・橘花・多氷・倉櫛、四處屯倉。是年也、太歲甲寅。

所謂、武蔵国造争乱である。武蔵国造争乱は、『日本書紀』継体紀の継体二年（五二七年）に勃発した筑紫君磐

武蔵国造争乱

井の乱と並ぶ東西の反乱伝承として、文献史学・考古学研究の重要な研究対象となってきた。「国造」「屯倉」という古代史上の重要なキーワード、具体的な登場人物、そして武蔵国造の墳墓と想定される埼玉古墳群の存在など極めて多彩な論点が内包されるテーマである。中でも戦後急速に進んだ考古学の発掘成果を基礎とした甘粕健の「南北武蔵対立説」^①（甘粕一九七〇）は、古墳時代後期の地方争乱を大和政権による列島規模の支配体制の刷新と位置付け、上毛野・北武蔵・南武蔵の対立構造をダイナミックに論じた学史に残る研究である。また、国造制・屯倉の成立過程やその性格も文献史学の立場から様々に議論され、重要な成果があがっている。

一方、現在の考古学では地域研究が高い精度で進みつつ

あり、甘粕が学説を提示した時代に比べて膨大な量の資料が蓄積されている。しかし、地域研究や遺構・遺物研究が進展するほどに論点と視野が狭くなり、全体的な歴史像が見え難くなつてくるのもまた学問の常である。甘粕が半世紀近く前に追いかけた夢、それを現代の考古学的な資料状況を踏まえた上で再考してみる必要があるのではないか。以上の視点に立ち、本稿では武蔵国造争乱を考古学的に再考する前段階の作業として、文献史学・考古学において蓄積された研究史を見直すとともに、考古学の最新研究の知見をまとめ、武蔵国造争乱に関する研究の現状と課題を整理する。

1. 武蔵国造争乱と考古学

(1) 甘粕健説の登場

『日本書紀』安閑紀にみる反乱伝承を、考古学的な事象と結びつけて初めて体系的に分析したのは、輪島誠一・甘粕健である(輪島・甘粕一九五八)。輪島・甘粕は、『横浜市史』をまとめる中で、多摩川西岸の観音松古墳・白山古墳、多摩川東岸の宝菜山古墳・亀甲山古墳に注目し、これらの首長を六世紀前半段階の武蔵国造に続く系譜と考え、支配領域は多摩川流域を中心とした南武蔵全体と想定し

た。そして、この首長系譜が五世紀で絶える事実をもって、多摩川流域の優位性がなくなり、それに代わって「見るべき古墳のなかつた」北武蔵の埼玉古墳群に有力な古墳が形成され始めるという現象を指摘する。さらに、武蔵国造争乱後に設置された屯倉のうち、橘花・多氷・倉櫛が律令制下の橘樹郡・多摩郡・久良岐郡に比定されることから、南北武蔵に見られる古墳の消長を武蔵国造争乱の伝承と結びつけ、「打ち負かされた小杵は南武蔵を本拠としていた豪族」の可能性を指摘した。

甘粕健はさらに上毛野・武蔵の関係を中心として議論を進める(甘粕一九七〇)。甘粕は、六世紀前半頃に上毛野を中心に分布する鈴鏡が下毛野・武蔵を覆う分布圏を構成する点を持って、「特異な祭祀形態によって結ばれた一つの文化圏」を想定する。そして、滑石製模造品の共通性などにみる上毛野の南武蔵への影響力を指摘すると同時に、亀塚古墳の副葬品に見られる大和王権との関係性を強調する。すなわち、五世紀後半から六世紀初頭における南武蔵の古墳の多様性は、分立する各首長が連合して武蔵国造という単一の地方政権を形成しながらも、あるものは大和政権に結びつき、あるものは上毛野政権に結びつくといった重層構造に起因している可能性を推定する。さらに、四世紀後半から七世紀前半に至る二〇〇年間の武蔵国の最高首

長墓として、宝萊山・加瀬白山↓亀甲山・芝丸山・野本將軍塚↓丸墓山・稻荷山↓二子山・鉄砲山↓將軍山・小見真観寺・若王子の変遷を想定し、五世紀後半における帆立貝式古墳の時期に、武蔵国造が上毛野君に服属したとする。以上の背景を踏まえた上で、六世紀前半における武蔵国造争乱を歴史的に位置付ける。つまり、六世紀前半に至って南武蔵の勢力が北武蔵を武力で倒し、国造の位を奪取しようとする。当時、武蔵国造に対して一種の宗主権を持っていた上毛野君に対して、笠原直使主が大和政権と結んで慣習を破り、国造の世襲制を確立した政変が武蔵国造争乱であるとする。

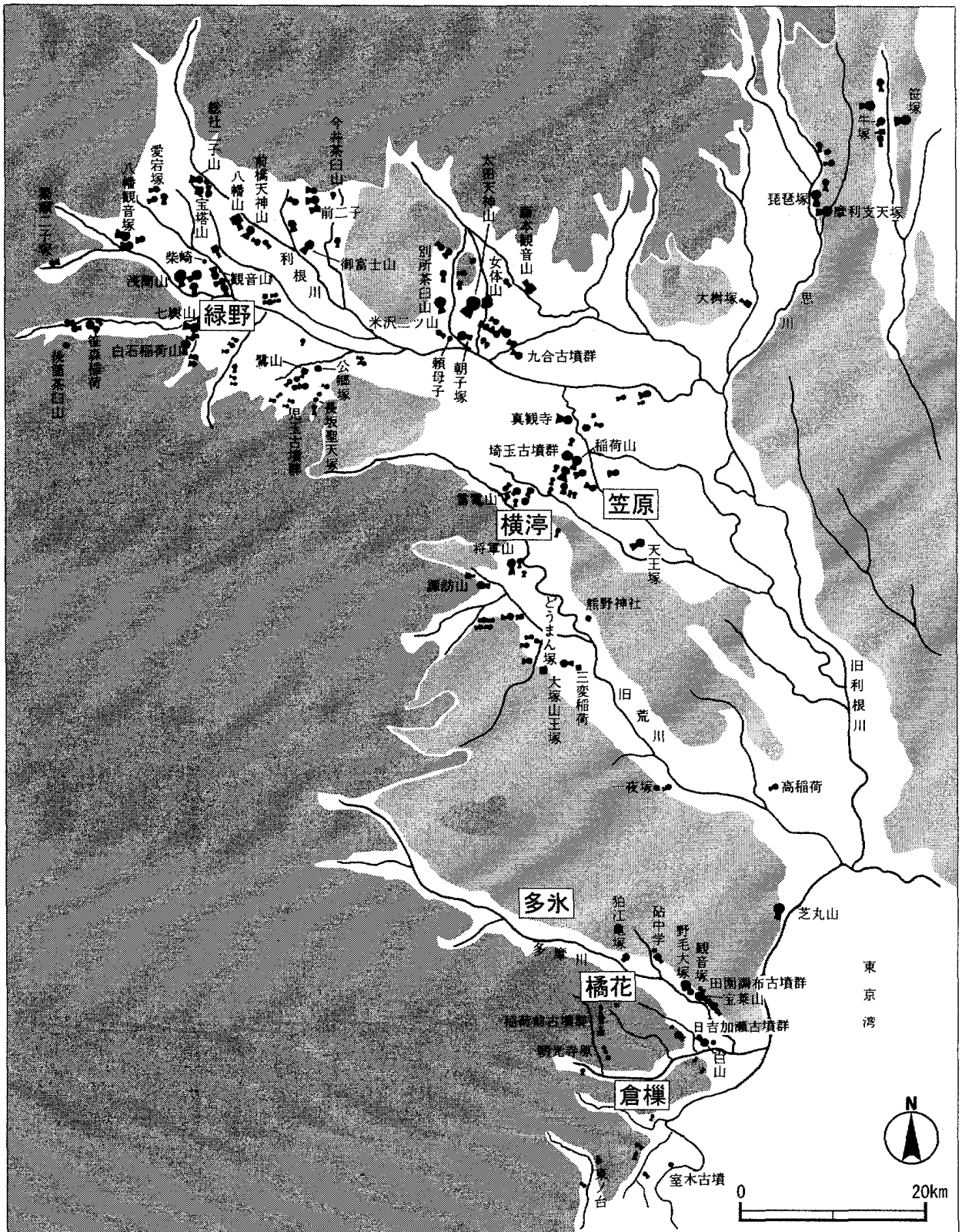
武蔵国造争乱を大和政権の地方支配構造の変質と位置付け、継体・欽明朝における内乱として定式化された社会・政治変動の一環とし、全国的なスケールで古墳時代の東国を歴史的に位置付けた甘粕の研究は、今なお色褪せない魅力的な学説である。甘粕はその後の発掘成果なども踏まえ、意見を修正しながら（甘粕一九九五・二〇〇四）、学説を維持し続けている（図一）。

(2) 甘粕説への批判

甘粕説に関しては、その後多くの批判が集中する。金井塚良一は、吉見百穴の分析の中で武蔵国造争乱後に設置された屯倉の横渟を比企地方の横見郡に比定できる蓋然性が

高いとし、その設置時期を唐突な外来葬制（胴張り石室と横穴墓）の出現から六世紀末～七世紀初頭と考えた（金井塚一九七五）。すなわち、屯倉の設置を推古朝とする原島の研究成果（原島一九七四）を引用しながら、横渟屯倉の管掌者として北武蔵に移住した新羅系渡来氏族の壬生吉志によって比企に外来葬制が出現したと考えた（金井塚一九七九a）。一方で、甘粕健が比企地方など埼玉古墳群以外の北武蔵の古墳を問題にしている点を批判し、埼玉古墳群成立以前の比企の優位性を指摘する（金井塚一九七九b）。特に、野本將軍塚古墳の年代を、墳丘下の竪穴住居跡および封土中の土師器から五世紀後半～六世紀前半とし（金井塚一九七九c）、「將軍塚古墳に象徴された比企地方の政治権力と、稻荷山古墳もしくは丸墓山古墳に代表される埼玉地方の政治集団の覇権をかけた抗争」が武蔵国造争乱の伝承の背景にあると考える（金井塚一九七九d・一九八〇）。また近年も「比企政権の埼玉移住」を再論している（金井塚二〇〇八）。

原島礼二は、『日本書紀』の屯倉設置記事の年次に見られる一・三・五・七といった数字に関して、陰陽五行説・讖緯説の陽数を重視した『日本書紀』編纂者の造作にすぎないとして、安閑紀に集中する屯倉設置記事を津田左右吉（津田一九五〇）と同じく信憑性が疑われるとし、乱後に



※ (甘粕1995・2004) (飯塚1986)を合成して作成。
 ※ 「横渚・橘花・多氷・倉櫓・笠原・緑野」の比定地は通説に従った。
 ※ 「横渚」については、八王子周辺に比定する説もある。
 ※ 旧利根川・旧荒川の古墳時代の流路に関しては諸説あるが、(飯塚1986)を示す。

図1 毛野と武蔵の主要古墳の分布

設置された横渟の屯倉も推古朝とする（原島一九七四）。故に、甘粕の南北武蔵対立説は成立しないとするが、武蔵国造争乱の記事自体は信憑性が高いとした（原島一九八七・一九九五）。

渡辺貞幸は、埼玉古墳群の被葬者が後世の武蔵国造と伝承された人々であった点は承認するものの、安閑紀の記事に一定の史実性を認め、それに基づいて埼玉古墳群や武蔵国の古墳時代を解釈する危険性を指摘する（渡辺一九七八）。その理由として、武蔵国という統一領域が六世紀初頭以前に成立していた考古学的証左は見出せない点を指摘し、埼玉古墳群出現の意味を考えるに際して、はるか南方の多摩川下流域の古墳群を引き合いに出す必然性はなく、まず比企地方の古墳群の消長との関連で把握するべきと主張する。また、当時の利根川本流が今よりも埼玉古墳群寄りを東南に流れていたと考えられる点から、北武蔵と上毛野南部の古墳群との間に密接な関係があった点も推定する。石野博信は、武蔵と上毛野の主要古墳を概観した上で、六世紀前半に断絶する、あるいは規模を縮小する古墳群は認められず、安閑紀の武蔵国造争乱の記事を史実とはできないとする（石野一九八五）。その上で、かつてあった争乱伝承が武蔵地域に存在した可能性を想定し、比企・児玉・多摩の組み合わせを考える。一方で、上毛野と北武蔵

は共通する文化圏を形成しており、五世紀に上毛野が古墳規模で圧倒的地域に立っていた点を強調し、武蔵国造争乱は「本来上毛野領域内のこととして処理されるはずだったが、大和政権の武力介入によって上毛野豪族連合は一旦敗退した」とする。

金井塚・原島・渡辺・石野の批判は、武蔵国造争乱の記事自体の信憑性を完全に否定したのではなく、武蔵国造争乱の年代に関する疑義と地域間関係に関する疑義に集約される。その後、発掘調査の進展によって年代論や地域研究が精緻化したことで、さらに甘粕説の綻びが明らかとなり、様々な説が提示されることになる。

(3) 百家争鳴

その後も武蔵国造争乱の記事と考古学的な現象を結び付ける研究は多く発表され、まさに百家争鳴の様を呈する。しかし、甘粕のように考古資料を駆使した体系的な学説というものはなく、個別の地域、あるいは個別の事象から甘粕説の矛盾を解決しようと試みた研究が蓄積される。ここでは代表的な説を整理する。

まず、上毛野と北武蔵の関係についてより深く掘り下げた議論を行ったのが、飯塚卓二である（飯塚一九八六）。飯塚は、埼玉古墳群を旧利根川水系に属する古墳群と位置付け、上野・下野・武蔵といった律令期の行政単位を前提

としてきた従来の議論に代わって、旧利根川水系・旧荒川水系の流域に展開する古墳群の消長を整理した。特に、飯塚の議論の出発点には「武蔵」という概念成立以前の北武蔵は、所謂毛野の一角であり、五世紀前半に存在する円墳や帆立貝型古墳の被葬者は、官僚的性格を強めた毛野地域政権の構成員ではなかっただろうか」とするように上毛野の影響を大きく見積もる点が特徴である。その視点から、主に前方後円墳の墳丘企画を分析する。飯塚は、多摩川下流域における宝来山↓亀甲山↓野毛大塚の墳丘形態の変化を、上毛野の政治変動に対応するものと考えた。つまり、小野山節が指摘する五世紀の畿内政権による各地の墳墓形態の規制（小野山一九七〇）を否定し、上毛野を中心とする利根川水系の階層秩序と理解する。さらに、太田天神山古墳段階での毛野地域政権という構造は、「大王雄略の命によって毛野制圧に赴き、毛野の一角であった埼玉に本拠地を築いた」杖刀人の乎獲居によって五世紀後半代に刷新されたと考える。なお、群馬県高崎市の平塚古墳に関して、稲荷山古墳と相似墳である点を指摘し、観音塚古墳出土の画文帯神獸鏡が稲荷山古墳と同範である事実を踏まえて、平塚古墳と稲荷山古墳の被葬者が同盟関係にあった可能性も指摘する。

一方、清水久男も飯塚の基本的な議論を踏襲し、雄略に

よって派遣された杖刀人乎獲居によって上毛野の領域拡大を阻止するために埼玉古墳群が造営されたと考えた（清水編一九九五）。清水は、弥生時代における樽式・岩鼻式土器の分布を根拠に北武蔵を上毛野の範囲として捉え、大和王権が上毛野の勢力を削ぐために、使主を支援して小杵を排除し、上毛野から北武蔵を完全に独立させた地域構造の变革が武蔵国造争乱だったとする。故に、小杵の出身地は乱後に屯倉の置かれた横渟であり、その他の屯倉はもともと大和政権に従順であった南武蔵に置かれたと考え、南武蔵を全く別の地域圏と捉えた。この点に関しては、奈良時代の土器を分析した福田健司も南北武蔵の土師器が明確に分かれる点から両者を異なる文化圏としている（福田一九七八・一九九五）。また清水は、屯倉の設置地域に関して、橘花では第六天古墳、倉楪では瀬戸ヶ谷古墳・軽井沢古墳、多氷では稲荷塚古墳・白井塚古墳など胴張り複室構造の石室を持つ重要な古墳が存在する事実を重視し、六世紀後半〜七世紀初頭において屯倉経営のために中央から派遣された官吏が被葬者である点を指摘する。そして、この地域の屯倉設置を六世紀中葉とした上で、同じ時期に上毛野に置かれた緑野屯倉の経営者の墓として七輿山古墳を挙げた。

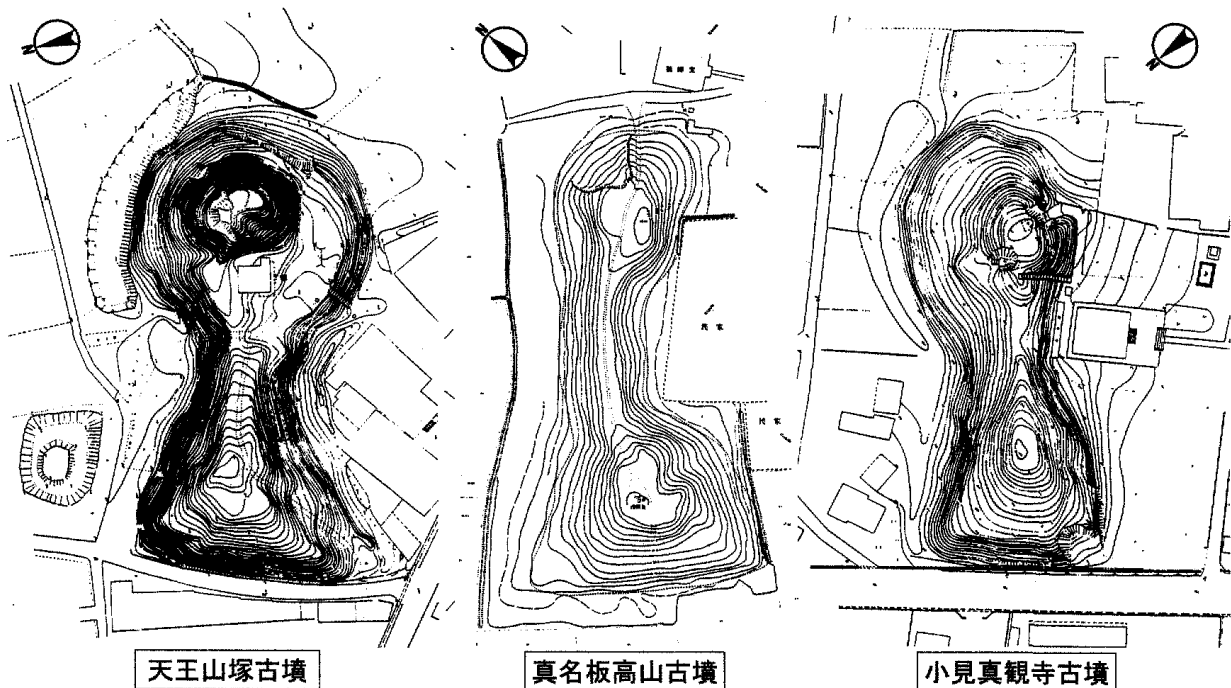
飯塚・清水の議論に見られるように、稲荷山古墳出現以

前の北武蔵を上毛野の領域の一部とする考えは、太田天神山古墳の存在に引きずられたもので、後述する最近の地域研究の成果からすれば再考の必要があるものの、武蔵国造争乱の同族小杵・使主の争いを北武蔵の限られた地域における内紛と見て、そこに上毛野の勢力が関与したと考える立場は以後の主流となつていく。

比企の前方後円墳を分析した若松良一は、比企と埼玉の関係を明快に論じる（若松一九七八）。若松は、前期に前方後円墳が卓越する比企において、五世紀中葉に至って当該期最大規模の一一五mの前方後円墳である野本將軍塚古墳が築造され「比企地方の大首長の地位を得た」とみる。その影響力は南多摩地方まで及んでいた可能性も指摘する。そして、「雄略天皇の近侍武官として奉事」した乎獲居が武蔵に派遣され在地豪族化したと考え、ここに国造制が成立したものとす。その後、武蔵国造争乱において武蔵国造と覇権を争ったのは、南多摩・児玉・比企いずれの勢力でもなく、利根川右岸低地を基盤とする埼玉から分出した同族だと考える。その年代に関しては屯倉の設置年代に関する原島説に従い六世紀末〜七世紀初頭とし、埼玉古墳群の將軍山古墳・若王子古墳（使主墓）と真名板高山古墳・小見真観寺古墳（小杵墓）の組み合わせを想定した。六世紀後半段階において生出塚窯産の大型円筒埴輪を樹立

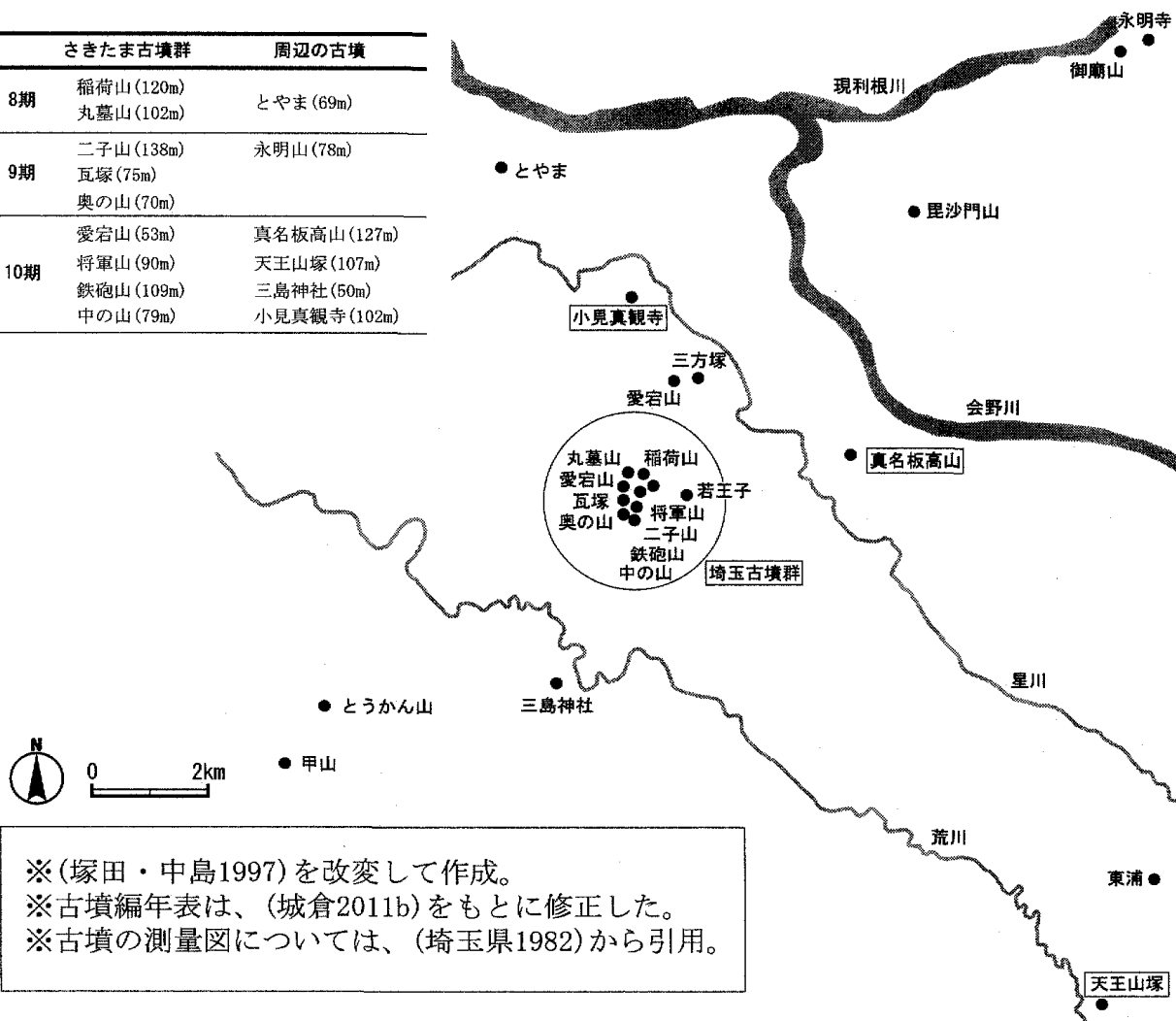
し、埼玉古墳群の周縁に位置する真名板高山古墳（一二七m）、菖蒲天王山塚古墳（一〇七m）、三島神社古墳（五〇m）などが埼玉古墳群の將軍山古墳（九〇m）・鉄砲山古墳（一〇九m）に迫る、あるいは凌駕する規模を持つ点は塚田良道も注目する（塚田・中島一九九七）（図2）。塚田は、そのうち最大規模を誇る真名板高山古墳について、その立地から旧利根川の水運を管掌した経済力・外交力をもつ首長を想定する。また、若松は埼玉古墳群とこれら周辺に位置する前方後円墳の墳丘の設計型を比較し、菖蒲天王山塚・真名板高山・小見真観寺がいずれも北武蔵の伝統的な設計法に由来することを示し、埼玉古墳群の傍系の勢力が拡大することを説く（若松一九八二）。

武蔵における首長墓の変遷をまとめた滝沢規朗も、若松とほぼ同様な結論に達している。滝沢は、南北武蔵を土器の地域色と古墳の分布から、十二の領域に分けて各領域における古墳群の消長をまとめた（滝沢一九九二）。滝沢は、都出比呂志が指摘する首長系譜の三つの全国的画期（五世紀前・五世紀後・六世紀前）（都出一九八八）が武蔵地域でも適用できるかを追求し、各領域の画期が都出のいう全国的画期とは連動しない点を確認する。その上で、武蔵国造争乱の問題については、南武蔵への上毛野からの影響を指摘する甘粕説に対して、全国的に分布する石製模造品や



0 30m

	さきたま古墳群	周辺の古墳
8期	稲荷山 (120m) 丸墓山 (102m)	とやま (69m)
9期	二子山 (138m) 瓦塚 (75m) 奥の山 (70m)	永明山 (78m)
10期	愛宕山 (53m) 将軍山 (90m) 鉄砲山 (109m) 中の山 (79m)	真名板高山 (127m) 天王山塚 (107m) 三島神社 (50m) 小見真観寺 (102m)



0 2km

※(塚田・中島1997)を改変して作成。
 ※古墳編年表は、(城倉2011b)をもとに修正した。
 ※古墳の測量図については、(埼玉県1982)から引用。

図2 埼玉古墳群と周辺有力古墳の分布

鈴鏡が「上毛野政権下から配布されたような状況が見出せない限り、上毛野との関連には賛同しがたい」とする。そして、屯倉に献上された南武蔵では『集成』十一期において前方後円墳が築造されていない点から、争乱を十一期の出来事とし、『和妙類聚抄』にある笠原郷が存在する埼玉古墳群を一方の当事者、もう一方を若松の指摘通り埼玉周辺の大型古墳に求めた。

若松・滝沢の研究は、甘粕の想定する南北武蔵の対立構造の矛盾を、考古学的な地域関係の把握によって浮き彫りにしている点において重要である。律令期の武蔵国の領域をアプリアリに認めた議論はできないという渡辺の批判を継承したものであり、争乱の勃発地が北武蔵の埼玉古墳群周辺であろう点は議論が絞られてきたとも言える。問題は、争乱の年代と南北武蔵の関係性である。沼野勉は、北武蔵の限られた地域で起こった武蔵国造争乱と南武蔵の四屯倉の設置はともに実在した歴史的事実としながらも、本来因果関係のなかった両者を『日本書紀』の編者が一つにまとめて作り上げたと考えた（沼野一九八〇）。その理由として、地方豪族が罪を贖うために献上した諸屯倉（糟屋屯倉・伊甚屯倉・廬城部屯倉）に関しては未だ検討すべき課題が多く、例えば筑紫君磐井の子である葛子が献上した糟屋屯倉の位置が、筑後を本拠にした筑紫君が直轄してい

たとは考えられない点などを挙げている。なお、四屯倉に關して言えば、横淳を比企に比定する説に対して鈴木靖民は横淳（ヨコヌ）から横見（ヨコミ）への音韻交替の可能性が低い点を指摘し、多摩地域の「横野」に比定される可能性を説く（鈴木一九九三）。また、関和彦も鈴木説を継承し、横淳と多氷が地域的に重なってしまふ矛盾を解消すべく、多氷を「おほひ」と読み、現在の品川区大井に比定する（関一九九五）。武蔵国造争乱を北武蔵で起こった争乱とする意見が高まる中で、屯倉が設置された南武蔵と北武蔵の関係をどう理解するか、その点が再び焦点となってくる。

雨宮龍太郎は、武蔵国造争乱の研究においては少なくとも東国規模の動態を示す必要性を主張する（雨宮二〇〇六）。雨宮は、基本的に北の「上毛野・下毛野連合」と南の「大和王権に協力的な南武蔵」の対立を争乱の巨視的な構造と捉えた上で、まずは令制武蔵国における无邪志国造・胸刺国造・知々夫国造の領域を比定する。知々夫国造は通説通り秩父郡に比定するが、无邪志国造を埼玉周辺、胸刺国造を荒川下流右岸に比定し、後者は前者に政治的に従属する立場と捉える。さらに、上毛野君の勢力範囲を本庄台地までとし、櫛引台地を挟んで无邪志国造と対峙していたと考える。その上で、五世紀後半における雷電山古墳

を中心とする比企丘陵北群と諏訪山古墳を中心とする比企丘陵南群の二者を使主・小杵の先代グループの対立とし、多摩川下流勢力を懐柔して荒川下流域に駐屯した大和政権の力をバックとして小杵を排除した使主が荒川を越えて埼玉に進出したとする。この争乱によって、上毛野に緑野屯倉が置かれ本庄台地は無邪志国に帰属し、荒川下流域には「傀儡的な胸刺国」が置かれたと推定する。兩宮の議論は考古学的な事象から丁寧な争乱を位置付けたものではなく物語的な要素が強いものの、南北武蔵の関係を位置付けようとした点の特徴である。

なお、以上とは全く異なる意見もある。尾野善裕は稲荷山古墳礫槲出土鉄剣の「辛亥年」¹¹五三一年説に立ち、「獲加多支鹵大王」を欽明天皇とみなす（尾野二〇〇一）。そして、上毛野君の支配・影響下にあった北武蔵の首長である笠原直使主（使主と乎獲居は同一人物だとする）が大和王権と結びつくことで、上毛野君の支配から脱却する契機が武蔵国造争乱だったと考へる。尾野の議論からすると、六世紀中葉～後半までのわずか半世紀ほどの間に埼玉古墳群やその周辺の多くの前方後円墳が築造されたことになり、尾野の年代観が成立するのは難しい。尾野の議論は地域的な動態を整理する作業がないままに、自説の年代観で武蔵国造争乱を強引に解釈する苦しい論理展開となつて

いる。

最後に少数意見として武蔵国造争乱を全くの虚構とみる意見もある。利根川章彦は、各論者による上毛野・南北武蔵の古墳編年を概観した上で、五世紀末～六世紀初頭と六世紀末～七世紀初頭の二つの画期を見出し、安閑紀の六世紀前半に大規模な政治変動が見出せないことから「考古学的に見る限り、武蔵国造の乱は虚構である」と結論付ける（利根川二〇〇三）。しかし、相對編年の確立も中途である各地域の古墳編年表の比較によって導き出された画期をもって、武蔵国造争乱を虚構とみなす利根川の議論もまた不十分である。地域の動態を考古学的手法で丁寧に位置付けることによって議論を蓄積すべきである。

（４）小結

以上、武蔵国造争乱の研究史について整理した。様々な仮説が提示されているが、考古学的知見の増加に基づく研究成果を踏まえれば、議論の前提となる部分が固められつつある点に気づく。以下まとめてみる。

① 武蔵国造争乱の伝承は、ある程度の歴史的事実を含んでいる。さらに、それは地域的な紛争ではなく、大和政権による列島規模の地域支配構造の刷新の一形態とみるべきである。

② 中期～後期の上毛野・北武蔵・南武蔵における古墳の消

長は連動する可能性が高い。

③五世紀～六世紀前半における南北武蔵は異なる文化圏を形成していた。それ故に、南北武蔵の対立を説く甘粕の学説は成立し難く、北武蔵の地域内における争乱である蓋然性が高い。

④勝利した笠原直使主の本拠地は行田市～鴻巣市周辺で、その一族の墓域は埼玉古墳群である。

⑤同族小杵の本拠地は、比企と埼玉古墳群周辺の二説がある。

⑥争乱の時期は五世紀末（稻荷山古墳）、六世紀前半（二子山古墳）、六世紀後半（將軍山古墳）の三説がある。

⑦屯倉の設置時期は六世紀前半、六世紀末の二説がある。

甘粕以来の研究の蓄積によって構築された以上の前提を出発点とすれば、武蔵国造争乱を読み解くための論点は必然的に集約されてくる。以下で論点をまとめてみる。

①武蔵国造争乱と筑紫君磐井の乱を、ともに六世紀における大和政権による地域支配の刷新と見る時、争乱に象徴される大和政権の支配構造の変化を列島規模で考える必要がある。それには、国造制・屯倉の成立を文献史学の成果も参照しながら位置付けると同時に、中期～後期における各地の首長系譜の消長を全国的な視野で比較する必要がある。

武蔵国造争乱

②武蔵国造争乱に関する研究の最大の争点である「地域首長の支配領域」を考古学的に確定する必要がある。争乱に関する様々な学説に決着がつかないのは、古墳時代における地域首長の勢力範囲を考古学的に確定できていないからである。この点に関しては、若狭徹の上毛野西部の分析（若狭二〇〇七）など、地域を単位として古墳・豪族居館・集落遺跡・農耕関係遺跡・渡来文化など多角的な要素を分析する地域研究が進んでおり、古墳時代の領域を把握する試みが行われている。地域を丁寧に位置付け、その年代と構造を把握し、それを踏まえた上で上毛野・北武蔵・南武蔵の地域間関係を考究していく必要がある。

③埼玉古墳群を武蔵国造の奥津城と考える点は、多くの研究者の意見が一致する。であるならば、埼玉古墳群の史的品格を地域社会の文脈の中で把握しなければならぬ。埼玉古墳群の出現経緯、埼玉古墳群の編年とその階層構造、埼玉古墳群以後の北武蔵の様相、これらを様々な要素から再検討する必要がある。埼玉古墳群に葬られた一族はどこから来て、どこに行ったのか、そこに武蔵国造争乱の答えが隠されていると言っても過言ではない。以上の論点を考古学的に追及することが武蔵国造争乱の歴史的理解につながると考える。以下では三つの論点につ

いて各章で取り上げ、最新の研究状況を整理し、現状の成果と課題を明確にする。

2. 国造制と屯倉の研究

(1) 国造制の成立とその意義

国造制に関しては長い研究史がある。中でも代表的な研究として石母田正や吉田晶の研究が挙げられる（石母田一九七一／吉田一九七三・一九八〇）。石母田の「在地首长制論」とそれを批判的に継承した吉田の「村落首长制論」は、古代国家成立期の地方支配の実態を考える上で示唆に富むが（大町一九八六）、篠川賢が端的にまとめているように、国造を頂点とする在地首長の重層的な階層構造に関しては、石母田・吉田の認識がほぼ一致している点が注目される（篠川一九九三）。さらに、国造制の成立年代に關しても、筑紫君磐井の乱平定後の六世紀前半～中葉とする説（吉田一九七五）が通説化しつつある。『隋書』倭国伝の記述から、七世紀初頭までに国造制が全国的に成立していた点は間違いないが、筑紫君磐井の乱を契機として六世紀中葉に西日本にほぼ一斉に施行され、崇峻二年（五八九年）段階で東日本にも一斉に施行されたという篠川賢の見解もある（篠川一九九六）。これに關しては、原島礼二も

西日本と東日本の国造制成立の時間差を想定する（原島一九七九）。以上、国造制の成立年代に關しては諸説あるが、①五世紀末以降の地域支配の動揺、②地方首長の反乱、③朝鮮半島における軍事的緊張、これらを背景として大和政権によって地方首長が二次的に再編成された結果、地方行政組織としての国造制が成立したという点に關してはほぼ共通認識が得られている（篠川一九九六）。

すなわち、国造制は各地の在地首長権が大和政権によってそのまま認められ全国一律に制度化されたわけではなく、大和政権と個別に關係をもつ在地首長の存在形態によって多様性を内包しながら（狩野一九九三）、大和政権によって二次的に地方首長が再編されていった結果として成立したものと考えられる（館野一九九九）。それ故に、六世紀前半に筑紫・武蔵で起こった東西二つの反乱の重要性が改めて認識されるのである。

(2) 東西の反乱伝承と屯倉

武蔵国造争乱を遡ること七年、「日本書紀」継体紀は、継体二十一年（五二七年）の筑紫君磐井の反乱を伝える。新羅に奪われた土地の奪還を目指す大王は、近江毛野に軍勢を与えて派遣した。それを知った新羅は磐井に賄賂を贈って遠征軍を阻止させた。筑紫君磐井の乱の勃発である。反乱は筑紫に將軍として派遣された物部大連麩鹿火に



※(伊藤1999)(館野1999)を改変して作成。
 ※測量図は『前方後円墳集成』より引用。

図3 岩戸山古墳と6世紀前半の北部九州

よって鎮圧され、父との連座を恐れた筑紫君葛子が糟屋屯倉を献上することになる。筑紫君磐井の墓は、福岡県八女市の岩戸山古墳に比定される。墳丘長一七〇mの九州最大級の前方後円墳であり、墳丘北東部の「別区」の存在も『筑後国風土記』逸文と合致する。征討軍と磐井軍の戦闘は筑後の御井郡で繰り広げられたとされ、磐井の勢力圏は筑後川沿いにあったと考えられるが、糟屋屯倉は磐井の勢力圏から離れた博多湾に面する筑前国糟屋郡に置かれることになる。これに関しては、筑紫君葛子を管理・支配する性質ではなく、朝鮮半島との対外拠点としての性格が考えられている(館野一九九九・二〇〇四など)(図3)。筑紫君磐井の乱は、武蔵国造争乱と同じく「反乱伝承・屯倉設置・国造制成立」がセットで認められる象徴的な出来事である(伊藤一九九九)。

六世紀前半における反乱伝承と屯倉の設置、国造制の成立を一連の過程と捉えたのが館野和己である(館野一九七八)。館野は屯倉の本質を「倉を中核とする経済的な機構」とする通説を批判し、筑紫君葛子・笠原直使主・伊甚直稚子による屯倉献上記事から、屯倉の本来的な性格を大和政権が地方に打ち込んだ楔、すなわち政治的・軍事的拠点であるとした(A型屯倉)。一方で田地を伴う屯倉をB型屯倉とし、豪族の田地を割取しそこに置いたB1屯倉から、

大和政権自らが田地を開発して置いたB2屯倉への発展を想定する。B1屯倉は六世紀前半頃から現れ、B2屯倉は推古朝に成立するとした。その上で、A型屯倉に関しては、糟屋屯倉の設置が信頼できる最初の記事であるとし、筑紫君磐井の反乱後に葛子が大和政権に完全に服属して初めて筑紫国造になったと考える。つまり、筑紫・武蔵・伊甚の屯倉設置と国造制の成立は表裏一体の現象と理解する。いわゆる「前期屯倉」を否定し、「後期屯倉」の歴史的意義を大和政権の全国支配のための「制度」と認識する。館野の議論に関しては、その機能が国造制や部民制に本来に伴うものであることから「結局は国造制・部民制の中に解消されてしまう」という鎌田元一の批判（鎌田一九九三・二〇〇一）がある。また、「大和王権が置いた政治的・軍事的拠点と限定し、農業経営の拠点としての役割を相対的に軽視する」姿勢に対する仁藤敦史の批判（仁藤二〇〇九）もあるが、屯倉の農業経営以外の機能に着目し、各地の反乱伝承と国造制の成立とを一連の過程として論じた館野の研究は画期的だった。

以上、屯倉に単一の機能を定義できない点に屯倉研究の難しさがあるわけだが、屯倉比定地を地域の文脈の中で考古学的に位置付けることが論争の解決に繋がると考える。例えば、筑紫君磐井の乱後に置かれた九州の諸屯倉では、

朝鮮半島出兵に関係する備蓄米を収蔵した可能性のある建物遺構が検出されるなど（小田二〇〇三・米倉二〇〇三）、関東に置かれた諸屯倉とは明らかに性格が異なる可能性が高い。つまり、考古学的に見ても屯倉の機能は単一ではない。また、その経営体制についても多様なあり方が予想される。例えば、仁藤は中央から管掌者が派遣されることを屯倉の本質とする点に関して疑問を呈し、「屯倉は在地首长層の協力がなければ経営は不可能であり、（武蔵国造争乱後に置かれた四屯倉でも）実質的には後の武蔵国造に経営を委任したと考えられる」と指摘する（仁藤二〇〇九）。この屯倉の多様性に関しては、屯倉設置と地域首长墓の関係を二つに類型化した桃崎祐輔の研究が注目される（桃崎二〇一〇）。桃崎は、屯倉設置後の首长墓の動向について、①在地とは異なる系譜の大規模墳が出現し、外来勢力の派遣が考えられる場合、②在地首长系譜の前方後円墳の築造が停止し、大中型円墳・方墳に転換する場合の二パターンを指摘する。武蔵国造争乱後の屯倉に当てはめれば、前者は上毛野の緑野屯倉に七輿山古墳が出現する現象（坂本一九九五・徳江二〇一〇）と対応し、後者は南武蔵に置かれた橘花・多氷・倉櫛屯倉周辺に七世紀に入って胴張り複室構造の石室を持つ重要古墳が出現する現象と対応しよう。屯倉の成立過程とその性格は各地域の歴史性に依じて多様

であることが予想されるので、各地を単位とした考古学的な分析を進める必要がある。

(3) 大和政権の地方支配と反乱伝承

さて、屯倉設置に上述のような多様な歴史性が内包されるところとしても、争乱後の屯倉設置と国造制成立の因果関係を論じた館野の指摘は、六世紀前半における大和政権による地方支配システムの再編成という文脈において重要な意義を持つ。館野の研究成果を重視すれば、反乱伝承を遡る段階の中央と地方首長の関係が改めて問題となってくる。例えば、雄略天皇に杖刀人首として奉事した乎獲居や典曹人として奉事した无利弓のように、それぞれ武蔵と肥後の豪族が「一定の職掌をもって」大和の大王の元へ上番していた事実が注目される。一方、『書紀』では、筑紫君磐井が任那派遣軍の将である近江毛野臣の軍を遮った時の磐井の言葉が記されている。

今為使者、昔為吾伴摩肩触肘、共器同食。安得率爾為使、俾余自伏爾前。

近江毛野臣と磐井の関係が以上のようなものだとすれば、磐井もやはり大和の大王のもとで奉事していた可能性が高い(館野一九九九)。すなわち、雄略・継体朝に見られる地方豪族の大和への上番が示すように、大王と地方首長の個別的な関係によって地方支配が点的に浸透していっ

たのがこの時期までの一般的なあり方だったと考えれば、六世紀前半における東西の反乱と屯倉設置はまさに大和政権による直接的な地方支配への転換だったと考えることもできる。その場合においても、館野が「各地の有力首長であつても国造になつた者とならない者があつた」(館野一九九九)と指摘するように、大和の大王と地域首長との関係の多様性によって国造の再編成は跛行的に進んだであろう点に注意をしなければならぬ。

(4) 中々後期における首長系列の固定現象

反乱伝承・屯倉の設置・国造制の成立を大和政権による地方支配の刷新と捉え、広域的に連動する現象と仮定すれば、各地の首長系列の消長に連動が認められるかが問題となってくる。

中々後期にかけての大王墓と地域首長墓の連動を指摘したのは、小野山節である(小野山一九七〇)。小野山は五世紀前半における応神陵・仁徳陵の造営時期に、地方首長の前方後円墳築造に規制がかかり(第一次規制)、五世紀後半の雄略の時期にまた規制がかかった(第二次規制)と考えた。一方、京都府桂川右岸の首長系譜を検討した都出比呂志は、盟主的な首長権の移動現象を認め、大王権力の直接の規制の結果として前方後円墳が築けなかったというわけではなく、大王が特定の盟主的な首長を介して首長系譜を

支配下に置いたとみる（都出一九八八）。その上で、都出は五世紀前半（応神・仁徳）、五世紀後半（雄略）、六世紀前半（継体）のそれぞれの時期における畿内の変動が全国的に連動する現象を指摘した（都出一九九一）。

都出の学説を受けて、近年では土生田純之が首長墓造営地の移動と固定の現象について論じている（土生田二〇〇四）。土生田は、全国各地の首長系列を概観した上で、首長墓造営地の固定という現象において、五世紀後半に築造を開始する一群と六世紀前半まで下がる一群の二者がある点を指摘した。その上で、国造制の成立を西日本で六世紀中葉、東日本で六世紀末〜七世紀初頭とする見解に従い、この時期に固定化する古墳群が国造系譜に繋がる可能性を主張する。土生田の想定する五世紀後半から六世紀前半における首長墓の固定化現象は、都出の言う第二・三回の画期に相当する。その背景として、土生田は畿内と結びついた勢力への首長系譜の固定を想定する。すなわち、雄略朝・継体朝期に列島規模の地方支配の変動があった点が考古学の側からも推測できることになる。

実際、埼玉稻荷山古墳の辛亥銘鉄剣や江田船山古墳の銀象嵌大刀の存在が示すように、雄略朝は大和政権の地方支配体制が強化される時期と捉える事ができ、関東でも上毛野の保渡田二子山古墳、下毛野の摩利支天塚古墳、北武蔵

の埼玉稻荷山古墳、常陸の三味塚古墳など各地域に前後して六世紀に繋がる首長墓が造営されている点が注目される。さらに、継体朝では、今城塚古墳・断夫山古墳と同一規格の墳丘として上毛野の七輿山古墳（若狭二〇一一）や常陸の舟塚古墳（新井二〇〇〇）の存在が指摘される。上毛野の七輿山古墳、北武蔵の埼玉二子山古墳、常陸の舟塚古墳、上総の殿塚古墳で見られる秀麗な人物埴輪と大型円筒埴輪の存在も、今城塚古墳の影響を看取できる要素と言える。

以上、五世紀後半から六世紀前半における首長墓固定化現象を畿内政権と地方首長の関係の変革と捉えた土生田の指摘にはかなり説得力がある。そして、その時期に固定化された首長系列が地域の歴史的文脈に応じた多様性を含みながらも、遅くとも七世紀初頭までには成立していた国造に繋がる系譜である点が注目される。特に、東国はこの時期以降の大型前方後円墳の多さが際立っており、「畿内政権を支える経済的・軍事的基盤」として重要な地域だったと考えられている（白石一九九二）。東国における地域首長の特性を領域支配者としてだけでなく、畿内勢力との個別的な関係によって大和政権を支える存在だったと考えるならば、雄略朝に築かれた大王と地方首長との関係が畿内政権の軍事行動によって大きく変化する時期、すなわち武

蔵国造争乱を契機として国造制が成立したとする館野の学説もかなり現実味を帯びてくる。この時期の造墓固定現象の全国的連動を踏まえるならば、東国の国造制成立を前方後円墳の消滅（新納一九八四）後の七世紀初頭まで下ると考える（白石一九九一）よりも、六世紀前半における東西の反乱を契機として国造制が成立し、畿内政権との関係の強弱に応じて跛行的に地域の支配構造の再編成が進むと考えるほうが整合的である。

以上、国造制と屯倉に関する文献史学の論争、首長系列の消長に関する考古学の論争を中心に研究成果を概観した。特に、反乱伝承・屯倉設置・国造制成立を一連の過程とみる館野の学説、五世紀後半～六世紀前半（雄略・継体朝）に列島各地の首長墓の画期があるとする都出・土生田の学説の重要性を認識した。では、その成果をよりミクロなレベルで考古学的にどう把握していくのか、それが問題となる。

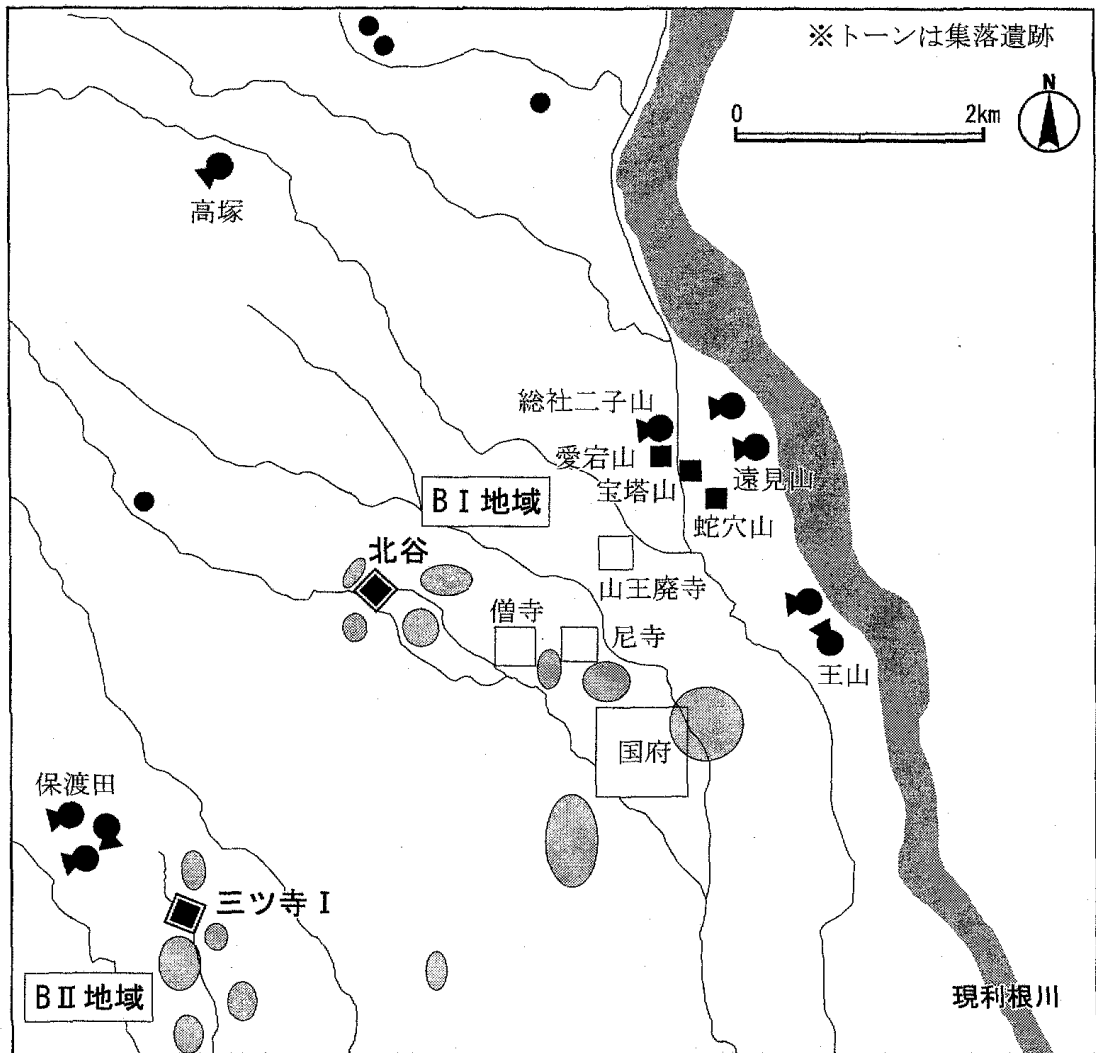
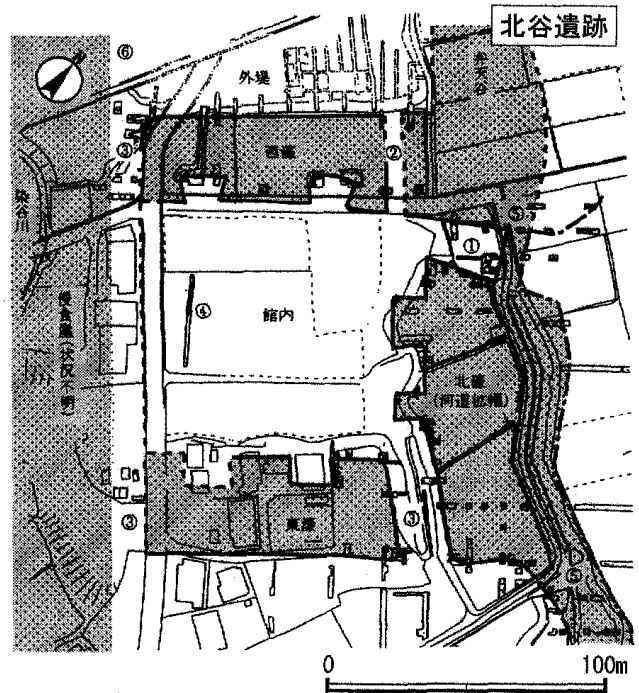
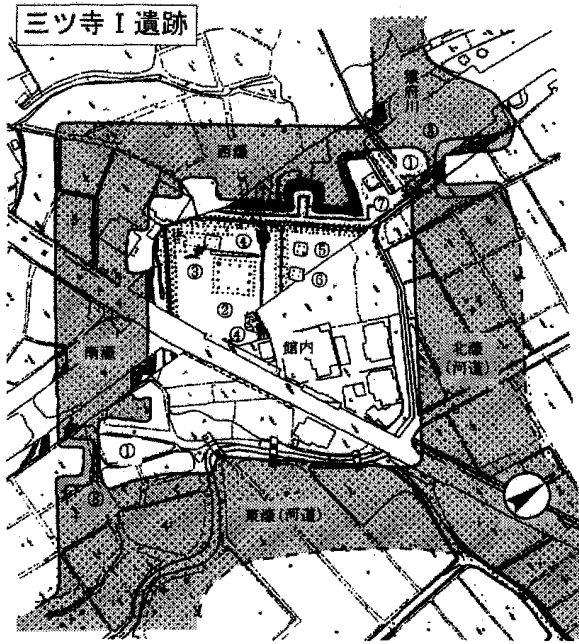
3. 考古学の地域研究と首長の支配領域

(1) 上毛野・下毛野の地域研究

武蔵国造争乱を考古学的に考えようとする時、「地域首長の支配領域」をどのように把握するかが最大の焦点とな

る。現在までの研究で、武蔵国造争乱に関係する上毛野・北武蔵・南武蔵の地域間関係に様々な立場が乱立しているのは、首長の勢力範囲を確定できていない点に大きな理由がある。その意味で、上毛野西部を中心に若狭徹が進めている地域研究は非常に示唆に富む。ここでは若狭の研究を出発点として、中期から後期における地域社会の範囲を考えてみたい。

若狭徹は、中期前半の太田天神山古墳を上毛野に存在する複数の政治勢力による共立と捉え、その背景に河内平野に進出した大和政権の変動を想定する（若狭二〇一一）。すなわち、前期に遡る「石田川式」を共有する集団によつてただ一度共立されたのが太田天神山の首長だと考え、共立解消後は個別発展の一形態として小地域経営が進むと説く。そして、「複数政治勢力の併存こそ、古墳時代を通じて上毛野地域のベシック」だったと指摘する。太田天神山古墳の共立解消後は、小地域単位での首長系列が生成されていく。例えば榛名山東南麓では少なくとも三つの首長系列が展開する。特に、山麓への社会的重心の移動現象を農業用水の掌握とみる若狭は、水源地を中心とした流域毎の地域経営を復原する（若狭二〇〇七）。これらの系列は、浅間山型の墳丘規格を継承する烏川流域や太田天神山型の墳丘規格を有する井野川流域など明らかな系列差を有しな



※三ツ寺 I 遺跡・北谷遺跡の測量図は、(若狭2011)より引用。
 ※総社エリアの古墳・集落・寺院の分布図は、(若狭2007)を改変して作成。

図4 三ツ寺 I・北谷遺跡と地域社会

がらも、舟形石棺に代表される共通性を持つ点が注目される（徳江一九九二・若狭一九九五）。また、古墳の設計規格以外にも、同時併存した可能性のある三ツ寺Ⅰ遺跡と北谷遺跡という豪族居館の構造が酷似するなど、流域を違えた小地域社会同士のネットワークも指摘する。すなわち、三ツ寺Ⅰ遺跡と北谷遺跡というわずか三kmしか離れていない豪族居館においても、前者は井野川水系を基盤とし保渡田古墳群を造営した首長系列、後者は車川水系（元利根川）を基盤とし総社エリアに造墓活動を行った首長系列と、いうようにその造営主体が異なっていたが、各地域社会が流域毎に基盤を持ちながらも、地域相互が緩やかに結び付いている状況を想定した（図4）。若狭が指摘する奥行き一五km、幅わずか三kmの「一見不合理に見える政治領域の形状」は、古墳時代首長を「水利権を統括する存在」として捉え直すことで、その合理性が初めて理解される。また、若狭は上毛野における小地域の自立的な経営を復原する一方で、①佐紀勢力、②古市・百舌鳥勢力、③雄略朝、④継体朝の各時代における大和政権の変動に伴う最新モードが移入されることで地域に変革が起こる可能性を主張する。大和政権による地域支配の思惑、生き残りをかけた地域の貪欲な行動、それらが合致した結果として優位地域の出現が起こるとする若狭の指摘は魅力的である。

一方、下毛野に関しては内山敏行がやはり首長系列の移動に注目した整理を行っている（内山二〇一一）。下毛野においては、中期末〜後期初頭において宇都宮市周辺から小山市北部に「首長墓が移動する」現象が指摘される。姿川の上流と下流で一五kmの距離を同一系譜の首長墓が移動したとする説（橋本二〇〇九）に関しては、「塚山系埴輪」の系譜関係も有力な裏付けになっている。内山は首長の系譜関係については慎重な態度を堅持しながら、摩利支天塚古墳の出現に関しては、埼玉稻荷山古墳・保渡田二子山古墳と同じく、後の国造系譜の起源となる首長墓造営地の固定現象の一環と把握する。さらに、中期・後期に畿内政権が配布したと思われる鈴杏葉・轡・小札などの集中域、あるいは須恵器・埴輪の生産技術伝播圏から、「広域の地域間関係の範囲」として上毛野・下毛野・北武蔵を含めた範囲を想定する。

なお、下毛野の首長系譜を考える上で「塚山系埴輪」の存在が重要になるわけだが、埴輪と首長系列の関係を考えるに際して、古墳時代後期の上総山武郡域の事例を挙げておく。山武郡では直径一〇kmの範囲に木戸川上流・木戸川下流・境川・作田川の四方所の首長墓集中域が認められ、その全ての小地域で「髭の武人」に象徴される特徴的な埴輪が樹立されていた（城倉二〇〇九）。すなわち、水系を

基盤とする小地域こそが首長の支配領域だった可能性が高いが、後の武社国造の領域として見れば、墳丘規格の共有や同一系統の埴輪が樹立される緩やかな連合関係にあったと把握できる。この状況は、中期に遡る上毛野・下毛野における水系を単位とした首長の小地域経営と、それらの地域社会相互のネットワークなどの重層的関係とも符合する。つまり、「複数政治勢力の併存こそ、古墳時代を通じて上毛野地域のベシック」という若狭の指摘は、東国の地域社会を考える上で、ある程度の普遍性をもつ仮説とも捉えることができる。

(2) 南北武蔵の地域研究

上毛野・下毛野の研究結果から、中期～後期の首長の支配領域が水系を基盤としたそれほど広範囲ではない可能性が考えられた。また、上毛野・下毛野・北武蔵を含めた範囲を広域的な地域間関係をもつ範囲として捉えることができるという内山の指摘もあった。では、武蔵国造争乱の中心舞台である北武蔵と南武蔵の領域と上毛野との関係は、どのように把握できるだろうか。

中期における北武蔵を上毛野の一部であるとする議論は、前述した飯塚卓司や清水久男の指摘があった。しかし、飯塚が指摘する平塚古墳と稲荷山古墳の墳丘規格の相似関係は、若狭によって平塚古墳が太田天神山型である点

が明らかにされ（若狭一九九五）、日高慎によっても上毛野と北武蔵の古墳に内部主体の構造や葺石の有無という相異が指摘されるなど、上毛野と北武蔵の「いずれかの地域からの影響力あるいは優位性を示すものではない」とされる（日高二〇一一）。実際に、日高が指摘するように稲荷山古墳における墳丘・周溝・埋葬施設・埴輪の諸特徴は上毛野とは全く共通性が見いだせず、「毛野から北武蔵へ影響を及ぼしたという積極的根拠は見出せない」という。もちろん、葺石の存在や埴輪の特徴から考えて、北武蔵でも児玉地域は上毛野の影響が強い地域と言えるが、埼玉周辺地域に関して言えば、古墳時代中期において上毛野の一部であったと考えるのは難しい状況にある。特に、この時期の首長の支配領域が小河川を単位とした水系を基盤としている点、太田天神山を共立した集団に太田天神山型の墳丘規格採用や舟形石棺・葺石などの共通祭式が認められる点、などを考慮すれば北武蔵を上毛野の一部とする見解が成立する可能性は限りなく低い。なお、児玉は古墳時代を通じて上毛野の影響が強い地域なのは確かである。六世紀における埼玉古墳群の埴輪は、「拠点生産地」である生田塚窯と比企・大里に点在する「衛星生産地」から供給された点が判明しているが（城倉二〇一一a）、児玉の割山窯の製品は供給されていない。つまり、埼玉古墳群造営以後

も児玉は上毛野の影響圏である可能性が考えられる。

次には北武蔵と南武蔵の関係が問題となる。注目されるのは前中期における比企の動向である。比企では前期を中心に前方後方墳の築造が集中し、大田区の宝来山古墳や亀甲山古墳などの前方後円墳が多摩川下流域に展開する南武蔵とは異なる様相を示す。この点から、日高は「南武蔵は異なる領域であった可能性を示している」と指摘する（日高二〇一一）。また、中期に至ると比企では雷電山古墳（八四m）、多摩川下流域では野毛大塚古墳（八二m）という大型の帆立貝古墳が築造されるように、「両地域は拮抗する別の領域」として理解できる。すなわち、甘粕が想定した南北武蔵を一つの領域として捉え、武蔵国造争乱をその首長権の交代劇に読み取ろうとした学説は、現在まで蓄積されてきた考古学的な成果からすればやはり成立し難い。であるならば、埼玉古墳群の系譜は上毛野にも南武蔵にも辿れないことになる。この点に関しては、金井塚・若松が主張するように比企との関係で、その出現を考えるのが現状では最も蓋然性が高い（金井塚一九七九d・若松一九七八）。

問題なのは、埼玉古墳群成立以後の北武蔵と南武蔵の関係である。日高は埼玉古墳群以後の北武蔵の圧倒的優位性を位置付ける中で、田中広明が明らかにした埴輪・土器の

流通ネットワークが「埼玉古墳群を頂点に橘花・多氷・倉櫛屯倉」の所在する東京湾岸まで及んでいる事実（田中二〇〇五）から、「古墳時代後期に武蔵は一つのまとまりとして認識できるのではないか」と結論付けた（日高二〇一一）。実際に、埼玉古墳群成立以後の南武蔵に関しては多摩川下流域に三〇〜六〇mの中小規模の前方後円墳が断続的に築造されるのみで、日高の言う「埼玉古墳群が北武蔵はもとより南武蔵をも包括していたかの如き状況」が生まれる。埼玉古墳群を中心とした土器や埴輪の流通圏が南まで拡大し、七世紀になると南北武蔵に共通性の高い複室構造の胴張り石室が登場するように両地域はおそらく密接に関係している。しかし、仮に日高が想定するように、埼玉古墳群出現以後の南北武蔵が「一つのまとまり」であるとするれば、直線距離で七〇kmも離れた地域に埼玉の首長の支配が及んでいることになる。奈良盆地の三倍近い面積を一人の首長が治めることになり、上毛野・下毛野の事例を考へても破格の勢力圏ということになる。埼玉古墳群の首長が中期の上毛野で共立された太田天神山古墳の首長の倍近い領域を持つことは現実的なのだろうか。次にはこの点を考えてみる。

（3）武蔵国造の支配領域

注意すべきは、田中広明が埼玉古墳群の首長を「国造」

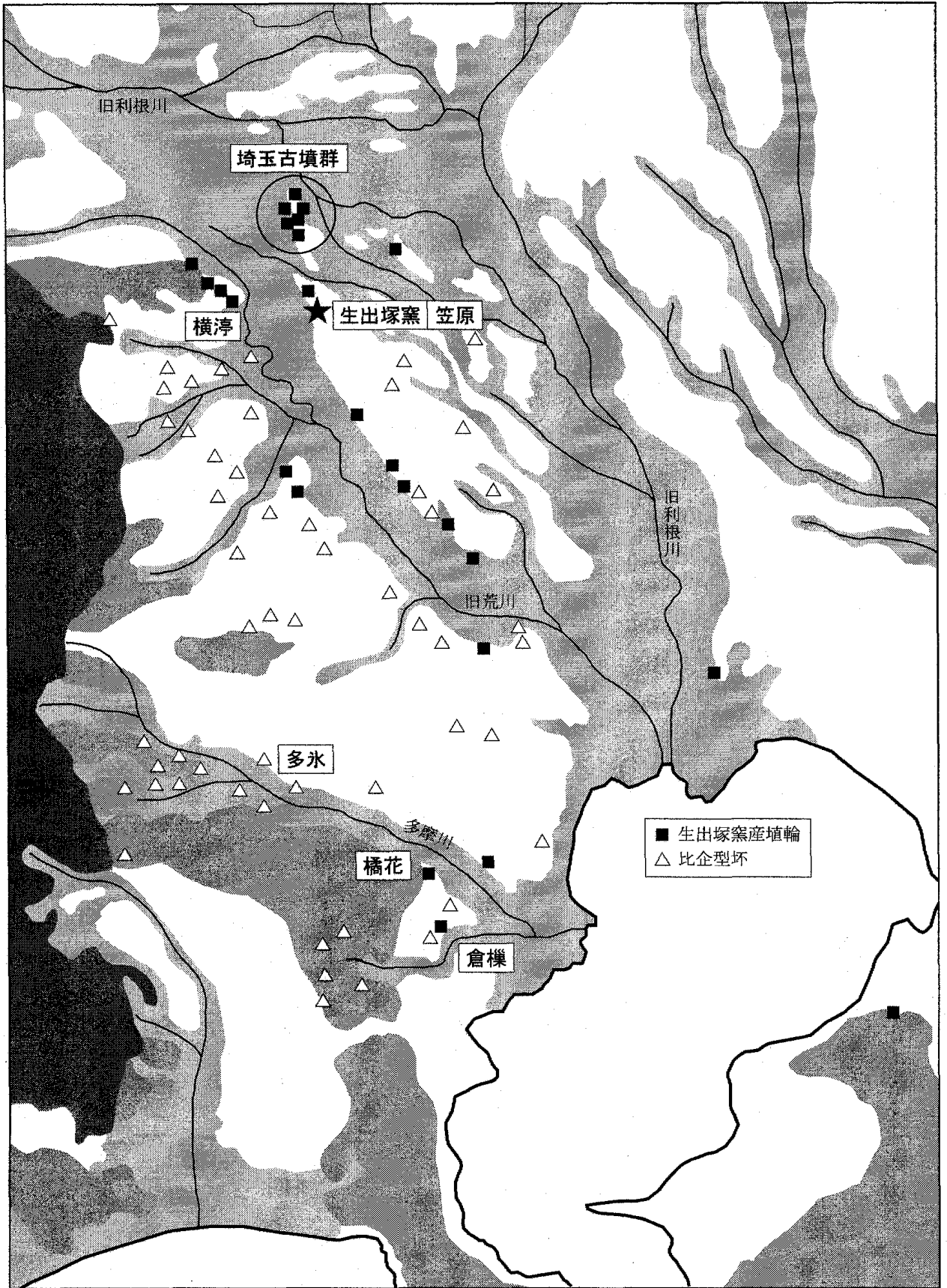
とした時の「クニ」の範囲とは、「国造の領域内の経済活動の範囲」と規定している点である（田中広一九九四）。その視点から、田中は土師器の食膳具、生出塚窯産埴輪、石室石材（田中一九八九）の流通を分析し、埼玉古墳群を造営した「国造の经济圈は、少なくとも六世紀前葉には成立し、七世紀中葉まで変質しつつも存続して」おり、その経済的基盤は「比企型坏を使用する比企・入間・足立・多摩等の各集落であった」とする。一方で、「小針型坏やその影響を受けた土師器」が小針遺跡・埼玉古墳群・生出塚遺跡など埼玉周辺で出土する点から、「小針型系坏を消費した遺跡こそ埼玉古墳群が直接経営した地域だった」とする（田中二〇〇五）。

比企型坏を分析した水口由紀子によれば、比企型坏は元荒川以南の広い地域に分布する（水口一九八九）。荒川・多摩川沿いに集中する生出塚窯産埴輪の分布（城倉二〇一a）と重複する点が注目される（図5）。生出塚窯はⅡ期（六世紀中葉）の二子山古墳・瓦塚古墳への供給を契機として大規模生産を開始し、Ⅲ期（六世紀後葉）に供給圏を東京湾岸まで拡大する点が判明しているが、比企型坏は生出塚窯産埴輪の展開と時を同じくして出現し始め、六世紀末〜七世紀初頭において「安定した生産体制下に入った」という。生産地の問題は残るにしても、極めて特徴的

な食膳具が生出塚窯産埴輪と同じく荒川・多摩川という流域を中心として広く展開する点は重要である。

また六世紀末〜七世紀前半は、北武蔵の比企と南武蔵を中心に「複室構造胴張り形切石石室」が出現してくる時期でもある（加藤一九九一・草野二〇〇六）。これら七世紀前半を主体に展開する南武蔵の複室構造の石室は、北武蔵の影響で出現したものと考えられているが、府中熊野神社古墳・稻荷塚古墳・北大谷古墳など七世紀代に急成長した勢力を屯倉の管掌者と考える意見は多い（比田井二〇〇五）。上円下方墳という特異な墳丘形態である熊野神社古墳の存在（府中市教育委員会二〇〇五）だけでなく、八角墳とされてきた古墳の墳丘形態の見直しも進んでおり（新井二〇〇四）、これらの古墳の位置付けに関する研究の進展が期待される。

以上、比企型坏、生出塚窯産埴輪、胴張り複室構造の石室から南北武蔵の関係を明確に位置付けることは難しいが、六世紀中葉以降に北武蔵と南武蔵の密接な関係が想定される点は間違いなく、それらの要素の展開においても南北武蔵に差異が認められる点が注目される。例えば、生出塚窯産埴輪の生産は二子山古墳に大きな画期があり、その後「遠距離供給用」のスリム化された小型品が生出塚Ⅲ期に東京湾まで拡散した。増田逸朗が指摘するように、北武



※(甘粕1995)(飯塚1986)(城倉2011a)(水口1989)を合成して作成。
※旧河川流路は、(水口1989)の地形図に(飯塚1986)の復原を合成して模式的に作成。

図5 生出塚窯産埴輪と比企型埴の分布

蔵では埼玉古墳群を頂点として墳丘や埴輪に階層性が明示されたとするならば（増田一九八六）、埼玉古墳群の首長の厳密な意味での支配領域は、埴輪に大型品・中型品・小型品の序列が明確に認められる地域、すなわち埼玉周辺・比企・大里・北足立にその中心がある可能性が高い。この点は、小針型坏から埼玉周辺を国造の直接経営地とする田中の認識と共通する。このように考えれば、生出塚窯産の遠距離供給品、あるいは比企型坏の南への拡散は、田中が指摘するように「流通経済圏」と把握するのが妥当かもしれない。であるならば、六世紀末〜七世紀初頭における多摩川流域の重要古墳の出現を重視して、屯倉設置をこの時期に想定する近年の説よりも、むしろ六世紀中葉〜後半における南武蔵の大型古墳の不在という現象をより深く突き詰めることが重要だと考える。つまり、埼玉古墳群における二子山古墳の出現以降に南北武蔵の関係が大きく変化していることと捉えるべきである。その意味で、多摩川下流域の六世紀後半の首長墓とされる多摩川台1号墳（野本一九九三）に、生出塚N29号窯類型が供給されている事実（城倉二〇一a）が示唆的な現象として注目される。

以上、埼玉古墳群出現以降の南北武蔵を一つの領域として考えるのではなく、埼玉古墳群の首長の実質的な支配領域はやはり埼玉周辺で、六世紀第2四半期の二子山古墳以

降に手工業生産品の流通圏が徐々に南へと拡大していき、七世紀初頭までに荒川・多摩川を介した経済流通圏が形成される可能性を考えた。遺物や遺構から想定される六世紀中葉以降の南北武蔵の関係は、埼玉古墳群の首長にとって多摩川流域が大宮台地・比企・大里・北足立などの中枢域とは異なる「特殊な地域」であった点を彷彿させる。二子山古墳出現が埼玉古墳群の大きな画期となり、この時期に緑野屯倉に七輿山古墳が出現し、南武蔵では遠距離供給用の生出塚窯産埴輪の広域供給や比企型坏の拡散が始まる。全国的な古墳変革の画期とされる継体朝直後の武蔵国造争乱と南武蔵の屯倉の設置を、以上のような考古学的な現象と結びつけることは十分に可能だと考える。朝廷の直轄地である南武蔵の屯倉に関して「実際には武蔵国造に経営を委任したと考えられる」とする仁藤敦史の見解（仁藤二〇〇九）と考古学的な状況がよく符合する点を注意する必要がある。

4. 埼玉古墳群の研究課題

（1）埼玉古墳群の被葬者論

前述したように埼玉古墳群を武蔵国造の奥津城とする点は、多くの研究者の意見が一致する。ということは、埼玉

古墳群の歴史的追求こそが、武蔵国造争乱を読み解く鍵となる点は間違いない。しかし、埼玉古墳群には膨大な研究史があるため、ここでは武蔵国造争乱を考える上で重要と思われる諸論点についてまとめる。まずは埼玉古墳群の被葬者像について整理する。

稻荷山古墳の後円部礫槨から出土した「辛亥銘鉄剣」は考古学・文献史学の多くの議論の的となった。当然、稻荷山古墳被葬者論もまた百家争鳴であるが、優れた研究の蓄積によっていくつかの前提が形成されつつある。以下にまとめる。

①「辛亥年」には四七一年説・五三一年説があるが、四七一年説が有力である（宮代一九九六・利根川二〇〇二など）。

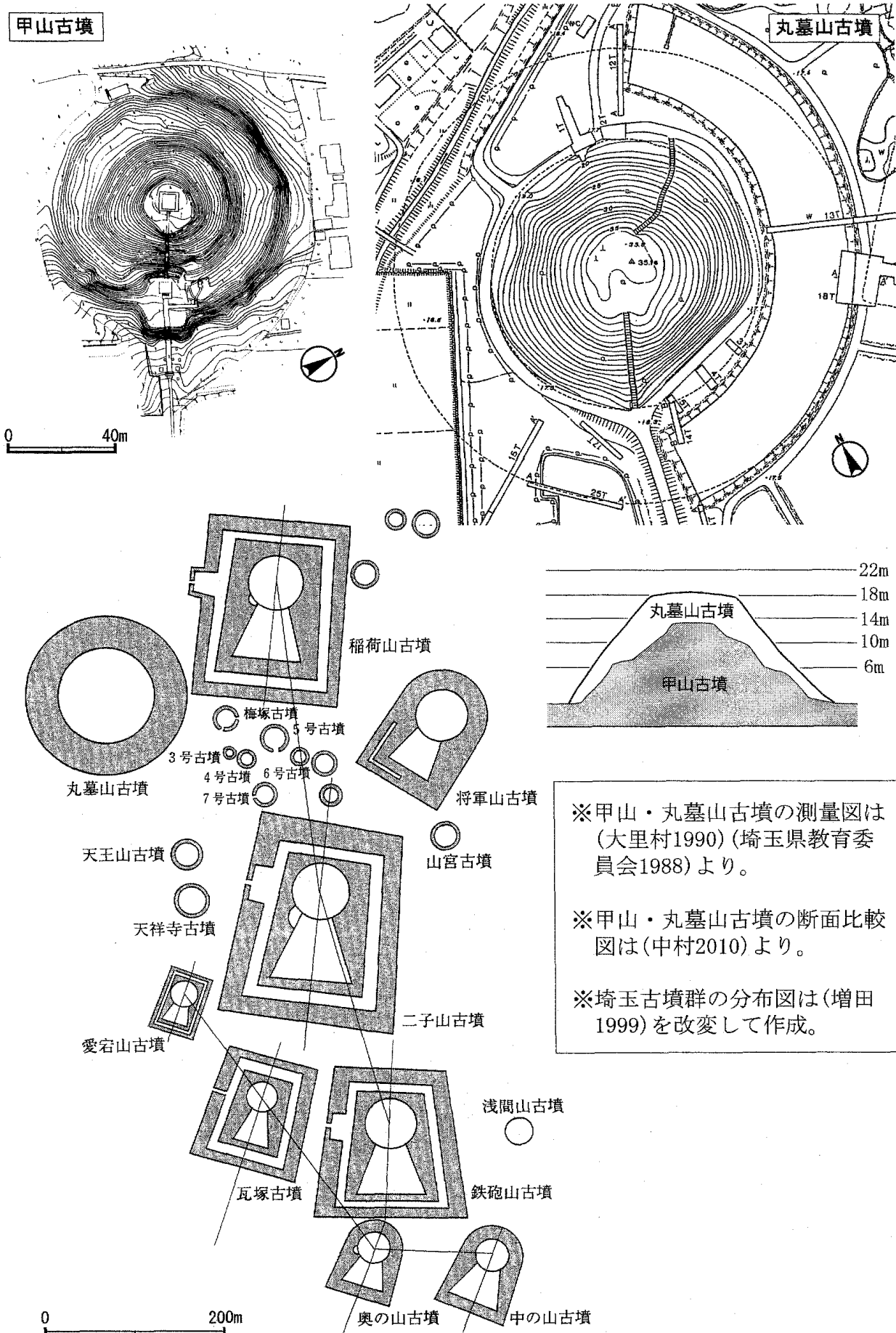
②乎獲居は雄略のもとに上番していた東国出自の豪族である（杉山一九九二）。

③稻荷山古墳の中心主体は礫槨ではなく、後円部中心に位置すると考えられる第三の主体部である。

今、乎獲居を稻荷山古墳の中心主体に葬られたとするのか（山田二〇〇八）、礫槨に葬られたとするのか（杉山一九九二）、それを判断することはできないが、少なくとも杉山が指摘するように「東国の兵士が畿内へ上番して大和王権の軍事的基盤の一翼を担っていた」点は確かで、畿内

の大王との個別な関係性によって埼玉古墳群の造営が始まった点が重要である。

丸墓山古墳は、直径一〇〇mを超える日本最大規模の円墳と言われる。その巨大な容積量（増田一九九一）や埼玉古墳群の中で唯一、部分的な葺石を持っている点など、特異な特徴が指摘される。その成立基盤を児玉郡域に求める説（増田一九九一）や、上毛野に求める説（杉山一九九二・坂本一九九六・加部二〇〇一）があり、特に後者の場合は、武蔵国造争乱の記事と結びつけて丸墓山古墳を「小杵墓」と考えている。特に、稻荷山古墳における三稜突帯の円筒埴輪（雷電山復古型―城倉二〇一a）に注目した杉山晋作は、丸墓山古墳にも三稜突帯があり二子山古墳にはない点を指摘し、稻荷山↓丸墓山↓二子山という年代観を確立した上で、六万立方メートルという破格の土量を用いたとされる巨大円墳の被葬者像を想定している点は重要である。一方、大里に位置する直径九〇mという巨大な円墳である甲山古墳に注目した中村倉司は、丸墓山古墳を使主墓、甲山古墳を小杵墓と想定した（中村二〇一〇）（図6）。二子山古墳については、甘粕健が武蔵国造争乱の勝利者である笠原直使主の墓と想定する（甘粕二〇〇四）。仮に、武蔵国造争乱の記事と結びつけなくとも、二子山古墳が稻荷山古墳に次いで築造された首長墓で鉄砲山古墳に繋がっ



※甲山・丸墓山古墳の測量図は
(大里村1990)(埼玉県教育委員
会1988)より。

※甲山・丸墓山古墳の断面比較
図は(中村2010)より。

※埼玉古墳群の分布図は(増田
1999)を改変して作成。

図6 埼玉古墳群と大型円墳

ていく「国造墓」である点は多くの意見が一致する。さらに、争乱で勝利した笠原直使主の本貫地である「笠原」に比定される鴻巣市の生出塚窯が、二子山古墳・瓦塚古墳への埴輪の供給を契機として、大規模生産を開始する事実（城倉二〇一一a）は重要である。被葬者を誰に想定するとしても、二子山古墳が埼玉古墳群を頂点とした北武蔵の地域社会秩序を形成する上での大きな画期となっている点は疑いない。

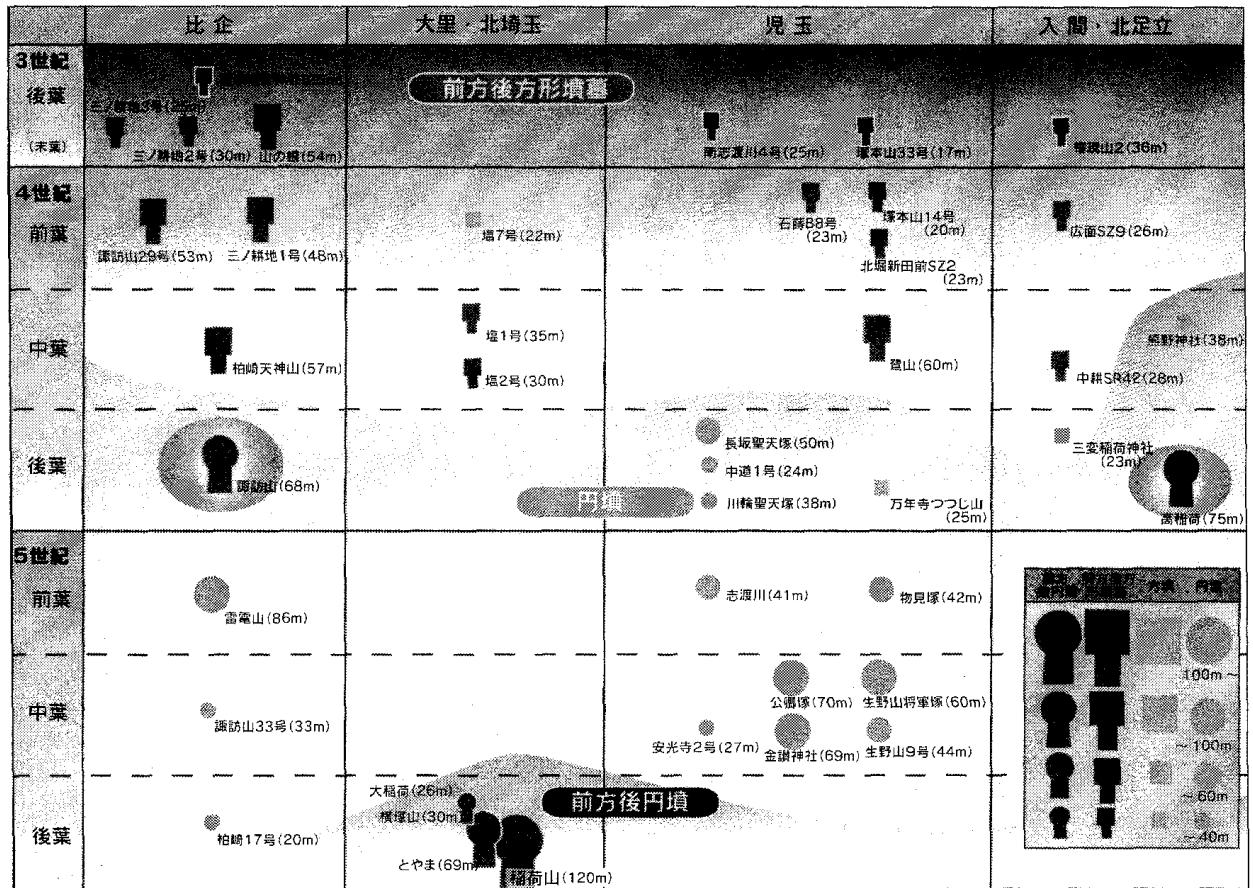
（2）埼玉古墳群出現前史―比企と児玉の前中期古墳―

甘粕健の南北武蔵争乱説が出された頃は、「見るべき古墳のなかつた」と表現された北武蔵だが、比企・児玉を中心として多くの前中期古墳が展開する。近年、稻荷山古墳出現以前の北武蔵の古墳の展開過程をまとめた君島勝秀は、前方後方墳↓円墳↓前方後円墳という流れを指摘する（君島編二〇一〇）。注意すべきは、比企・児玉が前中期にかなり連動した変動を見せている事実である（図7上）。児玉に多く認められる葺石も、雷電山古墳において部分的に確認される（埼玉県民部県史編さん室一九八六）などその影響力が伺われる⁴。

比企・大里で前期前葉に盛行した前方後方墳の周溝形態に、埼玉古墳群の特徴である長方形周溝の遡源を辿れる可能性もある点も注意すべきである。すなわち、長方形周溝

を分析した市毛勲は「前方後円墳における長方形周溝は、前方後方墳特有の長方形周溝の影響を受け、前方後円墳に取り入れられた」可能性を指摘する（市毛一九七四）。その意味で、比企の諏訪山29号墳のブリッジを持つ周溝形態が埼玉古墳群の「長方形で中堤に張り出しをもつ周溝」へと繋がっていく可能性は十分にある（図7下）。さらに、諏訪山29号墳に後続する諏訪山古墳は六八mの前方後円墳であり、続く五世紀前半には葺石を持ち、野毛大塚古墳（世田谷区教育委員会一九九九）を凌駕する規模の帆立貝古墳である雷電山古墳が築造されるなど、比企では大型古墳の造営が連綿と続いている。

比企は古墳時代前期の五領式の標識遺跡であり東海系の外来土器も多く出土する五領遺跡が存在し、前期における前方後方墳の卓越、中期における大型前方後円墳・帆立貝古墳の成立、と順調に地域社会の成長が追える点が重要である。近年では反町遺跡のような低地の集落遺跡の調査も進み、古墳時代前期に東海に系譜を進める集団によって丘陵に貫入する低地の開発が急激に進み、中期前半にかけて地域社会が成熟していった様相が読み取れる。また、墳長一一五mを超える大型前方後円墳であり、築造年代に諸説ある野本將軍塚古墳も五領遺跡・反町遺跡などの至近に位置し、前方部が低く細いその墳形から前期後葉説が有力に



※編年表は(君島編2010)より

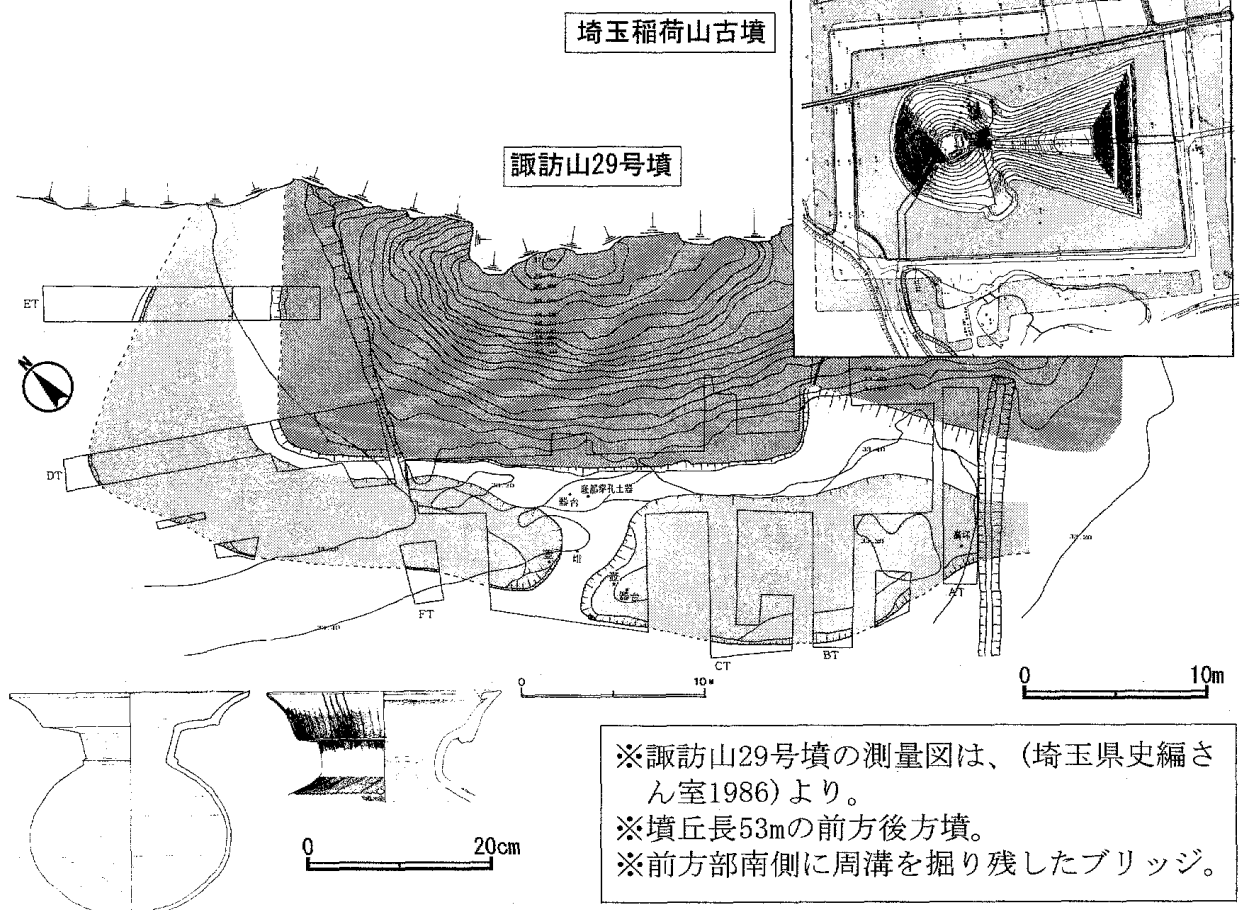


図7 北武蔵の前中期古墳と諏訪山29号古墳

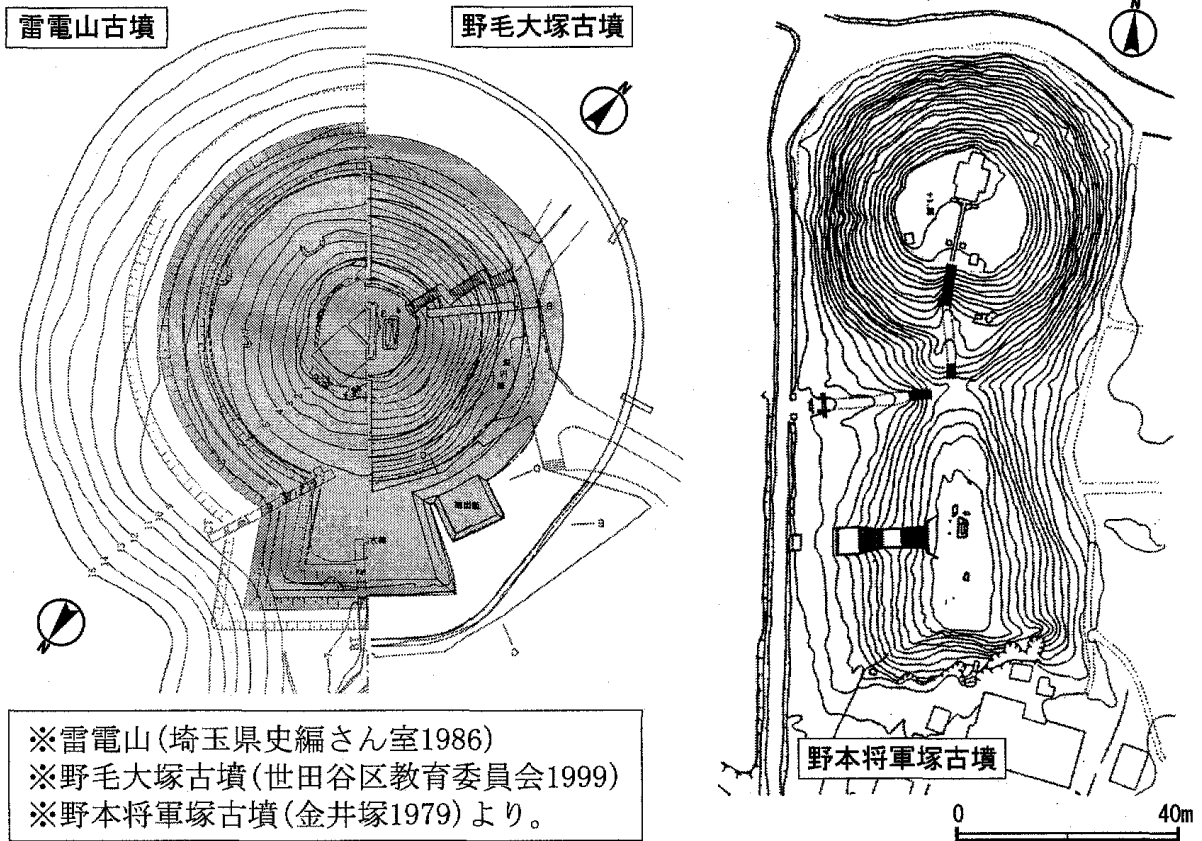


図8 雷電山古墳・野毛大塚古墳・野本將軍塚古墳

なりつつある点(君島編二〇一〇)も重要である。もちろん、発掘調査が行われていない現段階ではその築造年代を決定することは難しいが、一一五mを超える大型の前方後円墳の築造には稻荷山古墳に匹敵する労働力の投入が必要だったはずで、周辺集落が最も活性化する時期、増田が想定するように諏訪山古墳と雷電山古墳に挟まれる時期に野本將軍塚古墳の築造年代を考えるのが、現状からすると最も蓋然性が高いと思われる。仮にこの時期に野本將軍塚古墳を位置付けられるとすれば、前期における大型前方後円墳、中期の帆立貝古墳の出現と、比企地方の様相は甘粕が埼玉古墳群の前史として想定した多摩川流域とほぼ変わらない様相を持っているということになる(図8)。

以上、比企は五世紀末に「突如として」大宮台地に出現した埼玉稻荷山古墳のバックグラウンドとして十分な地域社会の成熟度を持っていると結論付けられる。稻荷山古墳・丸墓山古墳に雷電山古墳の極めて特徴的な円筒埴輪の系譜を引く埴輪(雷電山復古型)が存在し、生出塚系統の埴輪が比企系のIN1類を直接の祖形として誕生した点はおもはや疑いようがない(城倉二〇一一b)。すなわち、金井塚・若松・増田が想定する比企丘陵の勢力が、五世紀後半の農業技術の革新を背景として、大宮台地に進出し広大な低湿地開発に乗り出したとする説はほぼ動かない(増田

二〇〇二・斎藤一九八四など)。もちろん、その進出には稲荷山鉄剣に示されるように、畿内への上番によって生み出された畿内政権との個別的コネクションが背景にあるとしても、埼玉古墳群の出現は比企の地域社会の成熟と発展の当然の帰結として生み出されたものと考えるべきである。

(3) 稲荷山古墳の出現―埼玉古墳群の立地と旧地形、

群集墳と集落の動向―

埼玉古墳群の出現背景には、比企の地域社会の成熟があった点を想定した。当然ながら、大宮台地北端の埼玉古墳群出現の背景には、利根川・荒川の広大な氾濫地の開発が関連していると思われるが、この地域は関東造盆地運動(堀口一九七五)による地盤沈下や河川の氾濫によって古墳や集落を発掘調査で検出することが難しい地域として知られる(斎藤一九八四)。しかし、この氾濫原に稲荷山古墳並行期の比較的規模の大きい古墳が点在している点が注目される。とやま古墳(柳田他一九六七)、永明寺古墳(栗原・塩野一九六九/埼玉県一九八二)、鎧塚古墳(寺社下一九八一)などである。また稲荷山古墳の出現と軌を一つにするように古式群集墳が展開する点も注意しなければならぬ。生出塚遺跡北側に隣接する新屋敷古墳群がその代表例で、その盟主墳である新屋敷60号墳は鎧塚古墳・と

やま古墳と同じく、稲荷山古墳と同じ埴輪の生産体制が想定される(城倉二〇〇九)。さらに、北武蔵における群集墳の展開をまとめた杉崎茂樹も五〇〇年前後と六〇〇年前後から盛行する群集墳の二者を指摘し、前者を埼玉古墳群の出現、後者を埼玉古墳群の没落に対応する現象と指摘する(杉崎一九八九・一九九一・一九九二)。

また埼玉古墳群が位置する大宮台地北辺の旧地形を復原した杉崎の研究によれば、埼玉古墳群が所在する埼玉台地は佐間台地・万願台地・長野台地と連続しており、下忍台地・樋上台地を加えた台地の中間を古忍川、北を星川、南を元荒川が乱流していくような地形だったとされる(杉崎二〇〇四)。周辺の台地及び自然堤防上には小針・小針北・鴻池・武良内・高畑遺跡などの継続的な大規模拠点集落が認められ、大河川の水系を利用した水上交通を抑えながら、広大な低湿地の開発に乗り出した集団の動向を読み取ることができる。

旧地形・旧河川という古墳時代環境の復原、首長墓と群集墳の動向、集落の動態など多角的に議論を蓄積し、埼玉古墳群の歴史的意義を考える必要がある。

(4) 埼玉古墳群の編年とその意義

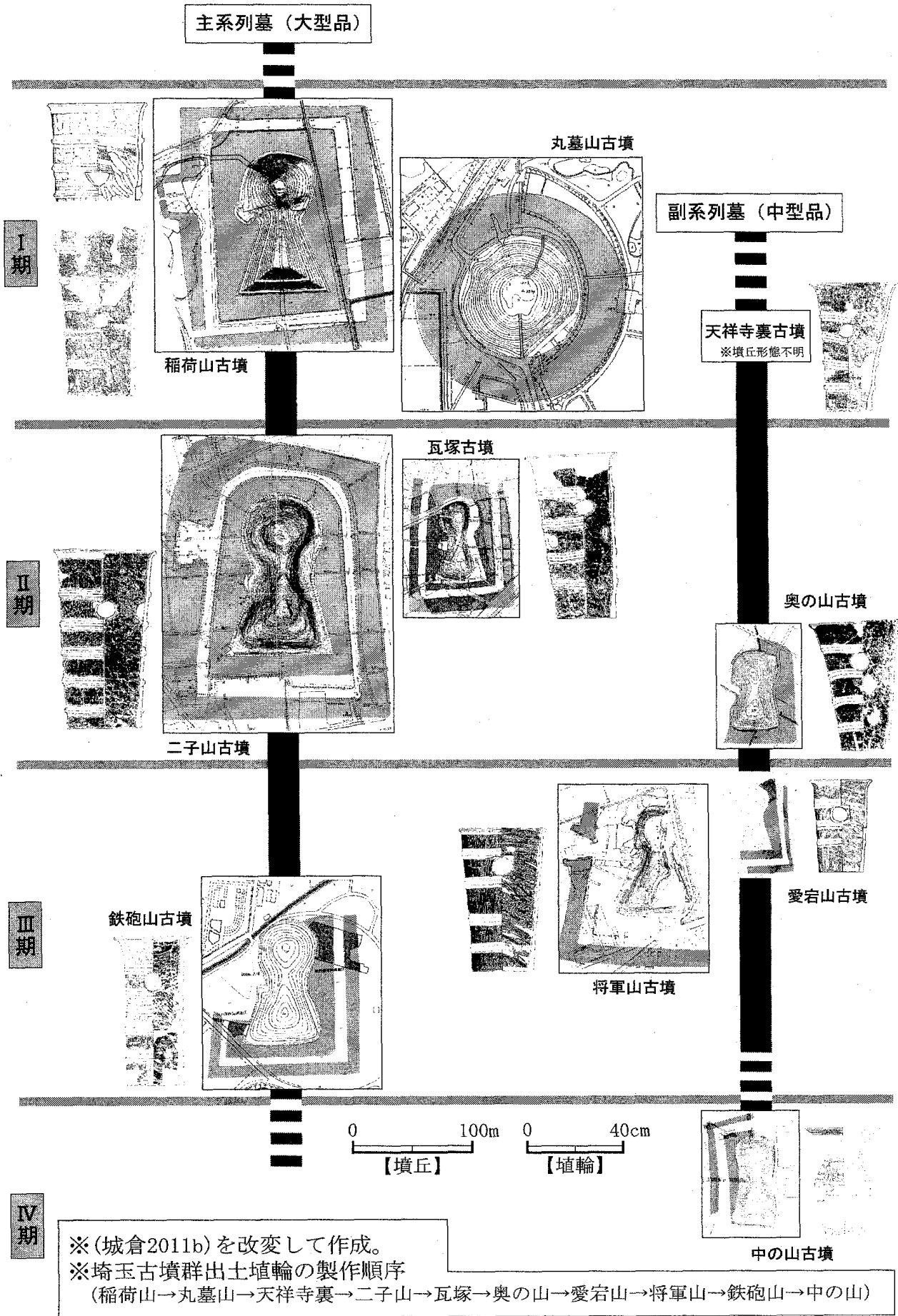
埼玉古墳群の歴史性を考えるとき、その基礎となるのは言うまでもなく編年という時間軸の整理である。埼玉古墳

群の編年で重要な位置を占めるのは、通時的に存在する埴輪の分析である。埴輪に関しては、埼玉古墳群から出土し報告された個体を総合的に分析し、系統把握と生産地特定を踏まえた上で編年を既に確立している（城倉二〇一一b）。特に生産窯まではほぼ特定している生出塚窯産製品は、生産地において八手状の窯が物理的な切り合い関係を持っていることから、埴輪の製作順序に関しては、ほぼ動くことはない。

しかし、その中で問題となるのは丸墓山古墳の位置付けである。丸墓山古墳出土埴輪に関しては、稻荷山古墳と同じく雷電山に系譜を辿れる三稜突帯がある点などから、稻荷山↓丸墓山↓二子山の順序が考えられていた（杉崎一九八八・増田一九九一）。これは、二子山古墳・瓦塚古墳に供給されたFT1類・FT8類の円筒埴輪が生出塚N地点30号窯とM地点27・28号窯で製作され、生出塚Ⅱ期の契機となっているのに対して、丸墓山古墳には生出塚の祖形となる稻荷山古墳IN1類に近い埴輪が確認されている事実とも符号する（城倉二〇一一b）。すなわち、丸墓山古墳段階では生出塚の大規模生産は始まっていない点は明らかで、埴輪の前後関係からする限り、杉崎・増田の想定した前後関係は動かない。一方で、近年では丸墓山古墳を二子山古墳よりも新しく考える意見が大勢を占める。榛名山二

ツ岳火山灰（FA）の存在故である。

群馬県における遺跡調査では早くから火山灰に注目した研究が行われてきたが（石川他一九七九）、埼玉県においても火山灰に注目した視点が示されるようになった（斎藤一九八一）。具体的には、榛名山二ツ岳の二回の噴火による火山灰、すなわちFA・六世紀前半、FP・六世紀後半を基軸とした編年である。実際に、FAの存在で従来の編年観（丸墓山と二子山の順序）が全く入れ替わる意見も出されるようになった（坂本一九九六）。しかし、坂本自身が「報告書を詳細に検討した結果、FAと思われる土層を確認した」と述べているように、過去の調査を報告書の記載で検討した見解である点に注意しなければならない。そもそもこの逆転現象の初出とはなるのは、新屋敷古墳群の報告書の中での田中正夫の記載である（田中正一九九四）。田中は、丸墓山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳の調査で墳丘盛土下の旧表土中からFAが検出されていることを踏まえ、た上で、二子山古墳の調査成果を見直し、二子山古墳の周溝埋土で「底面から一〇〜二〇cmの高さに白色粘質土を斑状に含むとの記載があり、これが稻荷山古墳・梅塚古墳同様FAである可能性が高いものと考える」と述べている。つまり、稻荷山古墳・梅塚古墳・二子山古墳でFAとされているものは、報告書の記載によつて推定されているもの



※(城倉2011b)を改変して作成。
 ※埼玉古墳群出土埴輪の製作順序
 (稲荷山→丸墓山→天祥寺裏→二子山→瓦塚→奥の山→愛宕山→将軍山→鉄砲山→中の山)

図9 埼玉古墳群の階層構造

で、それらが確実に同じF Aと呼ばれる火山灰であるのか科学的な分析がされているわけではない。当然、二子山古墳の墳丘本体にF Aがあるかどうかとも発掘で検証されているわけではない。もちろん、集落や群集墳の調査によって全面調査がなされ、ある程度の面的な広がりの中で火山灰由来の層が検出され、科学的な分析によって層の同異が確認されている場合などは編年の指標として火山灰は有効な方法である。広域的な鍵層になる点においても火山灰を基軸とした編年の重要性は明らかである。しかし、埼玉古墳群などの大型墳で部分的な調査と過去の成果の見直しで、「F Aと思われる層の有無」という曖昧で単純な二択によって、従来まで積み重ねられてきた遺物の編年研究がいつも簡単に放棄されてしまうのは危険な議論だと考える。求められるべきはF A層の認識に基づいた今後の発掘と科学的な分析、そして遺物や遺構の型式学的研究の更なる追及ではないだろうか。⁵⁾

なお、埼玉古墳群の編年と関係して注目されるのが、墳丘規格の研究である（梶一九八〇・岡本一九九七・塚田二〇〇二）。埼玉古墳群の最初となる稲荷山古墳では、長方形二重周溝という特殊性はあるものの、大仙型の墳丘規格が採用されたと考えられている。この大仙型の規格が埼玉古墳群で連綿と受け継がれ、周辺の前方後円墳にも影響を

与えたと塚田は指摘する（塚田二〇〇二）。また、將軍山古墳は千葉県内裏塚古墳群の古塚古墳と同形墳とされ、將軍山古墳石室の房州石の使用（高橋・本間一九九四）などから考えても、古塚古墳の墳形が將軍山古墳に影響を与えたと言われている。同じ墳丘規格の共有や継承、あるいはその変化は地域社会の構造を考える上で非常に重要で、今後更なる分析を進める必要がある。

最後に埼玉古墳群における階層構造について言及しておく。埼玉古墳群においては国造墓とされる大型前方後円墳だけでなく、中型前方後円墳が併存する事実から、宗主系列とこれを補佐する系列の階層構造が指摘されてきた（増田一九八六）。これに埴輪の系統と時間軸を合わせた通時的な階層構造も復原しているが（城倉二〇一一b）（図9）、この二系列の歴史的意義についても今後議論を深める必要がある。辛亥銘鉄剣や武蔵国造争乱の記事とこの二系列の存在はどのようにリンクするのか、そして埼玉古墳群後の古墳の展開にこの二系列はどのように関わっているのか、更なる議論を進めなければならない。

おわりに

『日本書紀』安閑紀の武蔵国造争乱について、文献史

学・考古学の研究現状と課題をまとめた。武蔵国造争乱を古墳時代中期～後期の関東における南北武蔵の対立と捉え、その歴史的意義を大和政権による地方支配システムの刷新という列島規模の動態の中で位置付けた甘粕健の優れた研究を出発点として、多くの研究が積み重ねられてきた。特に、発掘調査に基づく考古学的な知見の蓄積は目覚ましいものがあり、甘粕の学説が登場した半世紀前とは研究状況は一変している。それによって甘粕の想定した南北抗争は、考古学的な成果から否定されるに至っているが、武蔵国造争乱の歴史性をダイナミックに論じた甘粕説の重要性は少しも失われていない。今、求められているのは甘粕説を継承した広い視野で最新の文献史学・考古学の成果を総合して、武蔵国造争乱の歴史性を現代的に再構築する作業である。

本稿はその基礎作業として研究史を紐解き、武蔵国造争乱に関わる多くの論点に関して整理を行った。論点が多岐に渡ったため結論を一つに集約はできないが、多くの優れた研究を再評価し、考古学の最新の成果を踏まえれば、そこに「武蔵国造争乱の輪郭」が既に浮かび上がっていることに気づく。武蔵国造争乱の歴史的位置付けは、実際の考古学資料を丁寧を示すことで別に論じる予定だが、ここでは研究史を紐解いた成果と課題を各章毎に整理しておく。

(第一章) 武蔵国造争乱の考古学的研究を中心に、その諸説を整理した。甘粕説とそれに対する批判、そしてそれらを発展的に継承した研究が多く蓄積されている。しかし、考古学的成果を総合的に考える限り、武蔵国造争乱は埼玉古墳群を中心とした北武蔵の地域社会の中で勃発した争乱の可能性が高い。

(第二章) 国造制と屯倉の成立に関しては、文献史学で積み重ねられている議論、及び列島規模の首長墓の動態に関する考古学の研究成果を概観した。東西の反乱伝承と屯倉・国造制の成立が密接に関わっているとすると文献史学の成果と五世紀後半～六世紀前半に列島全域で首長系列の大きな変動があるとすると考古学の成果は、この時期に列島規模の大きな社会変革があった事実を示す。具体的には、雄略朝・継体朝の変革と捉えることができる。

(第三章) この大きな変革期の様相をミクロな地域社会研究から再構築する作業として、考古学の地域研究と首長(国造)の支配領域についてまとめた。農業や地域間交流に基盤を置く古墳時代社会では、水系の管理掌握が地域首長の重要課題であり、その領域も水系を単位としたそれほど大きな範囲ではない点が予想された。その事実を踏まえた上で、上毛野・下毛野・北武蔵・南武蔵を見直せば、それぞれの地域的な特性は明白だった。つまり、律令期の国

の領域を古墳時代におけるアプリアリな前提とすることはできず、各地域を支配・被支配という単純な論理でも位置付けることは難しい。地域を単位とした考古的事象の整理、それに基づく地域社会や領域・経済圏の認定、そのような基礎作業を踏まえた上で、各地域社会の関係性を考究する視点が重要だと認識された。その視点からすると、南武蔵の関係も、埼玉古墳群出現以降に「一つのまとまり」となったと考えるよりは、北武蔵に出現した強固な地域社会の影響圏・流通経済圏として南武蔵を把握するのが妥当だと考えた。その転機は、埼玉二子山古墳の造営にあった。

(第四章) 最後に武蔵国造の奥津城と想定される埼玉古墳群の研究課題をまとめた。埼玉古墳群の被葬者像については諸説あるが、その造営主体を武蔵国造と見る点、地域社会再編の大きな画期が稲荷山古墳と二子山古墳にある点、多くの研究者の意見が一致する。そして、埼玉古墳群の出現には、比企における前中期社会の成熟が背景にあり、その当然の帰結として大宮台地への進出と広大な低湿地の開発が五世紀末段階に開始されたことが推察された。また、埼玉古墳群における二系列の階層差は、武蔵国造による地域社会の支配構造を考える上で重要な鍵になるだろう点が認識された。

以上、先学の優れた研究を整理すれば、安閑紀の記述がある程度の史実を含んだ伝承であり、この時期の反乱伝承が継体朝による地方支配システムの刷新という列島規模の史的動態と連動している点が予想できる。そして、反乱伝承の諸現象の全てを中心に埼玉古墳群の二子山古墳が位置しているだろうという結論に辿りつく。研究史から導き出したこの結論を、考古資料を丁寧に追いかけることで証明する、それが次の課題である。

註

(1) 『日本書紀』安閑紀の反乱伝承を「武蔵国造争乱」と呼称する。東日本の国造制の成立は六世紀末まで下がるという意見(篠川一九九六)からすれば、「武蔵国造」という呼称は正確ではないことになるが、本稿では東西の国造制成立を、「筑紫君磐井の乱」と「武蔵国造争乱」の二つの反乱を契機とする立場(吉田一九七三)を採るので、「国造」を使用する。また「屯倉」に関しても、『日本書紀』独自の表現だとして「ミヤケ」を使用する立場もあるが、言葉の混乱を避けるため本稿では「屯倉」に統一して使用する。以上の用語は特別な場合を除き、基本的にカギカッコなしで使用する。

(2) 武蔵国造争乱に関する研究史を整理したものととして清水久男の仕事がある(清水編一九九五)。本稿では、清水の

整理を参考にしながらも、あくまで原典に基づいて研究史をまとめると同時に、一九九五年以降の成果も整理する。

- (3) 稲荷山古墳礫槨出土の辛亥銘鉄剣の乎獲居は、雄略天皇のもとに上番していた北武蔵出身の豪族と考えるのが最も蓋然性が高い(杉山一九九二)。北武蔵の地方豪族が「天下を左治し」たことに対する疑問もあるが、山田俊輔が指摘するように稲荷山古墳はTK23く47型式期の時期においては、岡ミサンザイ、狐井城山古墳に続く全国トップスリーの規模を誇り(山田二〇〇八)、大和政権の中枢で杖刀人首をつとめた人物、あるいはその一族が眠っているも何ら不思議はない。

- (4) 丸墓山古墳におけるまばらな葺石(貼石と呼ぶ意見もある)は、雷電山古墳にその発生の遡源を辿れる可能性がある。上毛野あるいは児玉地域で認められるしっかりと組まれた葺石ではない点に注意するべきである。

- (5) もちろん、埴輪の製作順序と古墳の築造順序が一致しない可能性も考えられる。大型墳墓で指摘される寿陵の問題や、古墳築造にかかる期間や埴輪樹立のタイミング(加藤二〇一一)など不確定の要素は多い。古墳の様々な要素を多角的に検討する必要がある。

謝辞

本稿の執筆に際しては、文献収集で大田区教育委員会の伝田郁夫氏にご協力をいただいた。伝田氏には学生時代以来、よき先輩としてご指導をいただいている。変わらぬ学恩に感謝を申

し上げたい。

引用文献

- 甘粕 健 一九七〇「武蔵国造の反乱」『古代の日本』第七巻
関東 角川書店
- 甘粕 健 一九九五「武蔵国造の反乱」再検討」『武蔵国造の乱―考古学で読む日本書紀―』東京美術
- 甘粕 健 二〇〇四「前方後円墳の研究」同成社
- 雨宮龍太郎 二〇〇六「无邪志国造と埼玉古墳群」『埼玉の考古学Ⅱ』六一書房
- 新井 悟 二〇〇〇「茨城県玉里村舟塚古墳の再測量報告」『駿台史学』一〇九
- 新井 悟 二〇〇四「多摩川中・下流域における七世紀の古墳の墳丘形態」『明治大学校地内遺跡調査団年報』一
- 飯塚卓二 一九八六「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』三 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一 一九七九「特集・火山堆積物と遺跡Ⅰ」『考古学ジャーナル』一一一五七
- 石野博信 一九八五「反乱伝承と古墳(二)」『季刊考古学』十 二 雄山閣
- 石母田 正 一九七二『日本の古代国家』岩波書店
- 市毛 勲 一九七四「前方後円墳における長方形周溝」『古代学研究』七十一
- 伊藤 循 一九九九「筑紫と武蔵の反乱」『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』吉川弘文館

内山敏行 二〇一一「中期後半から後期前半の下毛野」『古墳

時代毛野の実像』季刊考古学別冊十七

大里村 一九九〇『大里村史 通史編』

大町 健 一九八六『日本古代の国家と在地首長制』校倉書房

岡本健一 一九九七「確認調査のまとめ」『將軍山古墳』埼玉

県教育委員会

小田富士雄 二〇〇三「糟屋屯倉」遺跡の発見とその意義

『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初

重先生喜寿記念論文集刊行会

小野山 節 一九七〇「五世紀における古墳の規制」『考古学

研究』十六—三

尾野善裕 二〇〇一「中・後期古墳時代暦年代観再論—いわゆ

る〈武蔵国造の乱〉をめぐる—」『久保和士君追悼考古論

文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会

加藤一郎 二〇一一「円筒埴輪の設置方法」『埴輪研究会誌』

十五

加藤 修 一九九一「武蔵の胴張り複室墳について」『研究論

集』X 東京都埋蔵文化財センター

金井塚良一 一九七五『吉見百穴横穴墓群の研究』校倉書房

金井塚良一 一九七九a「渡来系氏族壬生吉志氏の北武蔵移

住」『埼玉県史研究』三 埼玉県史編さん室

金井塚良一 一九七九b「比企地方の前方後円墳」『埼玉県立

歴史資料館研究紀要』一 埼玉県立歴史資料館

金井塚良一 一九七九c「野本將軍塚古墳の謎—武蔵国造の争

乱と北武蔵最大の前方後円墳の築造時期—」『歴史読本』昭

和五十四年五月号 新人物往来社

金井塚良一 一九七九d「稻荷山古墳と武蔵国造の争乱」『歴

史と人物』第九年第六号 中央公論社

金井塚良一 一九八〇『古代東国史の研究』埼玉新聞社

金井塚良一 二〇〇八『馬冑が来た道』吉川弘文館

狩野 久 一九九三「部民制・国造制」『岩波講座 日本通史

二 古代—』岩波書店

加部二生 二〇〇一「丸墓山古墳被葬者論」『群馬県内の横穴

式石室IV』群馬県古墳時代研究会

鎌田元一 一九九三「部・屯倉・評」『新版古代の日本』第一

巻 総論 角川書店

鎌田元一 二〇〇一『律令公民法の研究』塙書房

君島勝秀編 二〇一〇『稻荷山出現以前の古墳』埼玉県立史跡

の博物館

草野潤平 二〇〇六「複室構造胴張り形切石石室の動態」『東

京考古』二十四

梶 国男 一九八〇「前方後円墳の設計型から見た武蔵国の成

立過程」『民衆文化の源流—東国の古代から近代—』多摩史

研究会論文集・平凡社教育産業センター

栗原文蔵・塩野 博 一九六九「埼玉県羽生市永明寺古墳につ

いて」『上代文化』三十八

埼玉県 一九八二『新編埼玉県史 資料編二』

埼玉県教育委員会 一九八九『丸墓山古墳』

埼玉県県民部県史編さん室 一九八六『埼玉県古式古墳調査報

告書』

斎藤国夫 一九八一「埼玉県内における二ツ岳噴出火山灰を堆積する遺跡について」『埼玉考古』二十

斎藤国夫 一九八四「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』六

坂本和俊 一九九五「七輿山古墳出現の背景」『群馬考古学手帳』五

坂本和俊 一九九六「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』六

寺社下 博 一九八一「鎧塚古墳」熊谷市教育委員会

篠川 賢 一九九三「国造はどのようにして地域を支配したか」『新視点 日本の歴史』二 新人物往来社

篠川 賢 一九九六『日本古代国造制の研究』吉川弘文館

清水久男編 一九九五『武蔵国造の乱—考古学で読む日本書紀—』東京美術

城倉正祥 二〇〇九『埴輪生産と地域社会』学生社

城倉正祥 二〇一一 a 『北武蔵の埴輪生産と埼玉古墳群』奈良文化財研究所

城倉正祥 二〇一一 b 『埼玉古墳群の埴輪編年』『埼玉県立史跡の博物館紀要』五

白石太一郎 一九九一「常陸の後期・終末期古墳と風土記建郡記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』三十五

白石太一郎 一九九二「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』四十四

杉崎茂樹 一九八八『丸墓山古墳・埼玉一〇七号墳・將軍山古墳』埼玉県教育委員会

杉崎茂樹 一九八九「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』八十七

杉崎茂樹 一九九一「古墳時代の北武蔵における有力層の動態」『古代探叢』Ⅲ

杉崎茂樹 一九九二「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』四十四

杉崎茂樹 二〇〇四「埼玉古墳群出現当時の地理的景観について」『調査研究報告』十七 埼玉県立さきたま資料館

杉山晋作 一九九二「有銘鉄剣にみる東国豪族と大和政権」『新版 古代の日本』八 関東 角川書店

鈴木靖民 一九九三「南武蔵と大和政権」『川崎市史』通史編一

関 和彦 一九九五「武蔵国造」と多摩』『月刊 歴史手帖』二十三—十 名著出版

世田谷区教育委員会一九九九『野毛大塚古墳』

高橋一夫・本間岳史 一九九四「將軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』二十九

滝沢規朗 一九九二「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』十

館野和己 一九七八「屯倉制の成立—その本質と意義—」『日本史研究』一九〇

館野和己 一九九九「ミヤケと国造」『古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来』吉川弘文館

館野和己 二〇〇四「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座第一巻 東アジアにおける国家の形成』東京大学出版会

田中広明 一九八九「緑泥片岩を運んだ道―変容する在地首長と労働差発権」『土曜考古』十四

田中広明 一九九四「国造」の経済圏と流通」『古代東国の民衆と社会』古代王権と交流二

田中広明 二〇〇五「武蔵のミヤケ」『考古学ジャーナル』五三三

田中正夫 一九九四「古墳から検出された火山灰と埼玉古墳群」『新屋敷遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

塚田良道・中島洋一 一九九七「真名板高山古墳の再検討」『行田市郷土博物館研究報告』四

塚田良道 二〇〇二「関東地方における後期古墳の特質」『古代学研究』一五七

津田左右吉 一九五〇「武烈紀から敏達紀までの書紀の記載」『日本古典の研究』下 岩波書店

都出比呂志 一九八八「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』二十二 史学編

都出比呂志 一九九一「日本古代の国家形成論序説―前方後円墳体制の提唱―」『日本史研究』三四三

徳江秀夫 一九九二「上野地域の舟形石棺」『古代学研究』二七

徳江秀夫 二〇一〇「七輿山古墳」群馬県教育委員会

利根川章彦 二〇〇二「稲荷山古墳の築造年代に関する覚書」『調査研究報告』十五 埼玉県立さきたま資料館

利根川章彦 二〇〇三「武蔵国造の乱はあったか」『調査研究報告』十六 埼玉県立さきたま資料館

武蔵国造争乱

中村倉司 二〇一〇「埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳―武蔵国造家内紛と大型円墳」『埼玉県立史跡の博物館紀要』四

新納 泉 一九八四「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会

仁藤敦史 二〇〇九「古代王権と「後期ミヤケ」」『国立歴史民俗博物館研究報告』一五二

沼野 勉 一九八〇「武蔵国造の争乱」『鉄剣を出した国』学生社

野本孝明 一九九三「多摩川下流域左岸の後期首長墓の変遷について」『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅱ』大田区教育委員会

橋本澄朗 二〇〇九「栃木の首長墓に関する諸問題」『野州考古学論叢』中村紀男先生追悼論集刊行会

土生田純之 二〇〇四「首長墓造営地の移動と固定」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会

原島礼二 一九七四「日本書紀」のミヤケ設置記事」『古代文化』二十六―一

原島礼二 一九七九「古代の王者と国造」歴史新書十六 教育社

原島礼二 一九八七「大和王権と武蔵国造」『新編 埼玉県史 通史編一』埼玉県

原島礼二 一九九五「大和王権の変動と古代武蔵の世界」『武蔵国造の乱―考古学で読む日本書紀―』東京美術

比田井克仁 二〇〇五「南武蔵における律令国家形成期の集落動態―多摩郡と豊島郡の比較から―」『東京考古』二十三

日高 慎 二〇一一「毛野の影響圏としての北武蔵―埼玉古墳群を中心として―」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊十七

福田健司 一九七八「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』六十四―三

福田健司 一九九五「武蔵国における古墳時代の問題点―武蔵国造の反乱―」『月刊歴史手帖』二十三―十 名著出版

府中市教育委員会 二〇〇五『武蔵府中熊野神社古墳』

堀口萬吉 一九七五『埼玉の地質をめぐって』築地書館

増田逸朗 一九八六「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人物往来社

増田逸朗 一九九一「埼玉政権の法量分析」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団十周年記念 埼玉考古学論集』埼玉埋蔵文化財調査事業団

増田逸朗 一九九九「辛亥銘鉄剣と武蔵国造」『國學院大學考古学資料館紀要』十五

増田逸朗 二〇〇二『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社

水口由紀子 一九八九「いわゆる比企型坏の再検討」『東京考古』七

宮代栄一 一九九六「古墳時代における馬具の暦年代―埼玉稲荷山古墳出土例を中心に―」『九州考古学』七十一

桃崎祐輔 二〇一〇「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦?、還暦!』武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集

柳田敏司・早川智明・塩野 博 一九六七『とやま古墳』埼玉県教育委員会

山田俊輔 二〇〇八「雄略朝期の王権と地域」『史観』一五八

吉田 晶 一九七三『日本古代国家成立史論』東京大学出版会

吉田 晶 一九七五「古代国家の形成」『岩波講座 日本歴史』二 岩波書店

吉田 晶 一九八〇『日本古代村落史序説』塙書房

米倉秀紀 二〇〇三「筑前におけるミヤケ状遺構の成立」『先史学・考古学論究』IV 考古学研究室創設三十周年記念論文 集 龍田考古会

若狭 徹 一九九五「上野西部における五世紀後半の首長墓系列」『群馬考古学手帳』五

若狭 徹 二〇〇七『古墳時代の水利社会研究』学生社

若狭 徹 二〇一一「中期の上毛野―共立から小地域経営へ―」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊十七

若松良一 一九七八「比企の大首長と武蔵国造」『諏訪山三十号墳の研究』

若松良一 一九八二「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の性格について」『土曜考古』六

和島誠一・甘粕 健 一九五八「第三章 古墳時代」『横浜市史』第一巻 横浜市

渡辺貞幸 一九七八「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐる」『考古学研究』二十五―三